

蹤跡

第六十一号

天  
皇  
制

# 目次

目次

序・本誌の構成について

## 第一章 現行の天皇制

1―1 日本国憲法における天皇

1―2 皇室典範

1―3 宮内庁

1―4 その他の関係組織

## 第二章 天皇制の歴史

2―1 古代

2―2 中世

2―3 近現代

## 第三章 近年の問題

3―1 生前退位

3―2 女系天皇

社研を引退して

## 序・本誌の構成について

本誌を手に取って頂き、誠にありがとうございます。

『蹤跡』は、部員全員が一つの大きなテーマを手分けして研究し、その成果を発表する雑誌です。昭和三四年に創刊され、今号で六十一号を迎えました。これはひとえに顧問の先生方やO B、読者の皆様のご指導とご協力の賜物です。この場を借りて御礼申し上げます。

今年のテーマは「天皇制」です。近年は生前退位による皇位継承や、女性天皇の議論などで、再び天皇に注目が集まっています。本誌をお読みにになった皆様が、「天皇制」についてより詳しく知ることができ、興味を持っていただければ幸いです。

本誌では、第一章では現行の天皇制の仕組みを、第二章では天皇制の歴史について、そして第三章では近年どのようなことが問題になっているのかを扱っております。

本誌は中高生が執筆したものに過ぎず、誤解、偏見、論理の飛躍等があるかとは思いますが、部員一同力を尽くした結果ですので、ご理解とご容赦をいただければ幸いです。

(高一 H.S.)

高二	高二	高二	高二	高一		高一	高一	中三		中三	高二	高二	2	2
F.	K.	Y.	Y.	Y.		M.	H.	K.		H.	K.	S.	F.	
T.	M.	O.	O.	K.		A.	S.	M.		T.	M.	M.	T.	
64	62	61	59	57		55	52	16		14	9	6	3	

# 第一章 現行の天皇制

## 1-1 日本国憲法における天皇

### I. 序

さて、天皇制について進めていくにあたって、まずこの章では現行の天皇制について、特にこの項では現行日本国憲法における「天皇」というものについて述べていく。

## II. 日本国憲法における天皇に関する本文

まず、本文を引用する。以下、日本国憲法中第一章「天皇」を引用したものである。引用元は衆議院の公式ホームページ。

### 第一章 天皇

〔天皇の地位と主権在民〕

第一条 天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。

〔皇位の世襲〕

第二条 皇位は、世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを継承する。

〔内閣の助言と承認及び責任〕

第三条 天皇の国事に関するすべての行為には、内閣の助言と承認を必要とし、内閣が、その責任を負ふ。

〔天皇の権能と権能行使の委任〕

第四条 天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行ひ、国政に関する権能を有しない。

2 天皇は、法律の定めるところにより、その国事に関する行為を委任することができる。

〔摂政〕

第五条 皇室典範の定めるところにより摂政を置くときは、摂政は、天皇の名でその国事に関する行為を行ふ。この場合には、前条第一項の規定を準用する。

〔天皇の任命行為〕

第六条 天皇は、国会の指名に基いて、内閣総理大臣を任命する。

2 天皇は、内閣の指名に基いて、最高裁判所の長たる裁判官を任命する。

〔天皇の国事行為〕

第七条 天皇は、内閣の助言と承認により、国民のために、左の国事に関する行為を行ふ。

一 憲法改正、法律、政令及び条約を公布すること。

二 国会を召集すること。

三 衆議院を解散すること。

四 国会議員の総選挙の施行を公示すること。

五 国務大臣及び法律の定めるその他の官吏の任免並びに全権委任状及び大使及び公使の信任状を認証すること。

六 大赦、特赦、減刑、刑の執行の免除及び復権を認証すること。

七 栄典を授与すること。

八 批准書及び法律の定めるその他の外交文書を認証すること。

九 外国の大使及び公使を接受すること。

十 儀式を行ふこと。

#### 〔財産授受の制限〕

第八条 皇室に財産を譲り渡し、又は皇室が、財産を譲り受け、若しくは賜与することは、国会の議決に基かなければならない。

### Ⅲ. 日本国憲法における天皇に関する条文と

#### その解説

日本国憲法は昭和二十一年十一月三日に公布、翌年五月三日に施行された憲法である。この前に使用されていた大日本帝国憲法（通称明治憲法）の改正という形をとっている。敗戦直後に作られたものであり、さらに当時の連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサーの指示によって連合国軍総司令部の作成した草案を下敷きにしているということもあり、比較憲法的に見た時にもいくつかの特殊性を持ち合わせている。

第一条はその特殊性について語られるときによく持ち出される条文である。この「象徴天皇と主権在民」は世界の憲法の中でも珍しいものであると同時に、第一章で天皇について定めながらも第三条において「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」、第四条では「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」などと定めた明治憲法とは大きな違いを見せるものとなっている。

「象徴天皇」と言う言葉があまりに知られすぎたがゆえにどうし

ても「象徴」と言う言葉が独り歩きしがちだが、昭和五十年三月十八日の国会では角田礼次郎内閣法制局第一部長（当時）によって「一口で言えば非政治的な地位」、法学者佐藤功著『憲法（上）』においては「（１）天皇はもはや統治権（主権）の総攬（総括保持）するものではない。主権は国民に存する。（２）天皇は世襲によってその地位につくものではあるが、その地位の根拠は「万世一系」の皇統にあるのではなく、「主権の存する日本国民の総意に基く」。（３）右の第二の原則の結果として、もはや天皇は神格性（現人神たる性格）を有するものではない。（４）第一の原則の結果として、天皇は主権の行使から遮断され、「国政に関する権能」を有しない。（５）以上の四つの原則の下において、天皇は「象徴」たる地位にある。すなわち、天皇は日本国および日本国民統合の「象徴」であるとされているが、この「象徴」という文字は、以上の四つの原則の下における天皇の地位を表現するものとして用いられているのである。」と述べられている。

第三条、第四条、第六条、第七条には天皇の行為に関する条文が並べられている。これらには天皇の行為が「内閣の助言と承認」や「内閣の指名」、あるいは「国会の指名」によって行われることが書かれており、先述したような明治憲法下における天皇に権力が一極集中してしまっていた形に対する反省なども思われる。

さて、ここでは七条に注目する。まずは第三号である。ここから先は直接天皇制には関係しないがこの第一章の中でもよく取り上げられるものなので述べていく。この条文に基づいて行われるのが「七条解散」と一般的に呼称される内閣による衆議院の解散である。これは「衆議院の解散」が「内閣の助言と承認」によって天皇が行うこ

とを利用して、内閣に衆議院の解散権があるとして内閣が衆議院の解散を行うというものである。これは憲法に直接の記載がなく、三権分立にも抵触するのではないかと言うことから法学者の間でも意見のかなり分かれるものである。平成三十年に提出された奥野総一郎衆議院議員の質問に対して安倍晋三内閣総理大臣（当時）は「御指摘の「第一回解散においては、「第六十九条及び第七条」を根拠としてのみ解散を行うことができる」との解釈にたつていた」の意味するところが必ずしも明らかではないが、憲法第六十九条は、同条に規定する場合には、内閣は、「衆議院が解散されない限り」、総辞職をしなければならぬことを規定するにとどまり、内閣が実質的に衆議院の解散を決定する権限を有することの法的根拠は、憲法第七条の規定である。「御指摘の「実質的決定権を含む場合もある」及び「内閣の自由な解散決定権」の意味するところが必ずしも明らかではないが、また、個々の学説についての見解を述べることは差し控えたいが、衆議院の解散は憲法第七条の規定により天皇の国事に関する行為とされているところ、実質的に衆議院の解散を決定する権限を有するのは、天皇の国事に関する行為について助言と承認を行う職務を有する内閣であり、内閣が衆議院の解散を決定することについて憲法上これを制約する規定はなく、いかなる場合に衆議院を解散するかは内閣がその政治的責任で決すべきものと考えている。」と答弁書に述べている。

第九号に記載される外国の大使・公使の接待が天皇を元首とするものかと言うのもしばし話題に上がる。国会でも複数回質問されたことがあり、昭和六十三年には大出峻郎政府委員（当時）によつて

「外交関係において国を代表する面を有しているとは言にくい、昭和四十八年には衆議院・内閣委員会で高島益郎政府委員（当時）によつて「非常に重要な国家を代表する機能という点において、天皇はいわゆる一般的にいます元首の性格をお持ちでない、むしろ象徴という点に重点がある」と述べられている。

このように天皇に関する憲法条項はさまざまな観点から特殊性を持っている。

## IV. 終わりに

「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。」

日本国憲法の前文の後、高らかに述べられる一文である。大日本帝国憲法が「大日本帝国八万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」で始まるのとは対照的だ。

近代以降の天皇というのは決して明るいばかりの存在ではなかった。大日本帝国憲法下ではほぼすべての権力が集中する存在として君臨し、その歪な権力体制から様々な歪みが歴史に残され、最後には太平洋戦争というあまりにも大きな惨禍を残した。戦後生まれた日本国憲法下でもその存在を崇め奉る者、嫌悪する者、様々な存在のさまざまな意見の中に置かれ続けた。「象徴」という立ち位置の不安定さゆえに前項でも挙げたような様々な問題点が問われ、前では取り上げなかった「大嘗祭などの儀式は国教分離に反するのではないか」といったことも問われた。これらのことを考えても、日本国憲法成立後七十年経つてもなお真の意味で政治的でない存在とはなれ

ていないのではないだろうか。

この国の最高法規である日本国憲法において「日本国民統合の象徴」と明記されているのである。日本国民がその一人一人の地位を保ちながら、さらに一つとなれる。そして、そこに象徴として天皇と言う存在がある。そんな国家となる日を私は願っている。

(高二 F. T.)

## 1—2 皇室典範

### I. 概要

この章では皇室典範について取り上げる。一口に皇室典範と言ってもその存在は戦前と戦後で大きく違う。形式面での戦前の皇室典範と戦後の皇室典範との違いを取り上げた上で、それぞれの内容について解説したい。

### II. 大戦前後の皇室典範の違い

#### ①形式的な違い

まずは、戦前の皇室典範について「憲法と天皇制（横田耕一）」から引用する。「皇室事務について定めた法での体系である政務法体系の頂点にある法規範として、政治に関わる法の体系である政務法体系の頂点にある大日本帝国憲法とならぶ、国家の最高規範であった。」そして、皇室自律主義の下、帝国議会はこの改正に関与できなかった。

一方、現在の皇室典範は、憲法第二条に「（前略）国会の議決した皇室典範（後略）」との記述があり、あくまでも皇室典範は日本国憲法下において国会が制定する法律の一つであると読み取れる。

#### ②内容の違い

再度「憲法と天皇制（横田耕一）」から引用する。戦前の皇室典範は「皇祖皇宗の『遺訓』を前提としており、これまでの慣行を確認し、明示化したもの」であった。一方、現在の皇室典範は政教分離を

はじめとした憲法やGHQの意向を受けて、宗教的な行事をはじめとして内容が変更されている。詳しくはこの後の章で詳しく述べる。

### Ⅲ．皇室典範の内容

この章では、現皇室典範の内容を見ていきたい。なお一部省略している。

#### 第一章 皇位継承

##### 第一條 皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する。

憲法一四条の男女平等に反するのではないかという議論もあると思う。

これについて「ドキュメント皇室典範（高尾英司）」では皇室典範を起草した高尾亮一の考えを記している。高尾は第一四条より第二条を優先した。つまり、憲法第二条「皇位は、世襲であつて（後略）」について考察し、それをもとに起草した。憲法第二条の「世襲」が指しているのは戦前まで続いてきた皇位の世襲と同様のものであり、そして、今までの皇位の世襲というのは基本的に男系男子に対して行われてきた。それを踏まえ、男系男子が皇位を継承するものと定めた。

個人的には天皇というものを存続させるならば、以前と同様の考え方で存続させるべきだと考えるので、この起草段階での考え方は

大いに納得できるが、考え方次第というところが大きいだろう。

##### 第二條 皇位は、左の順序により、皇族に、これを伝える。

一 皇長子

二 皇長孫

三 その他の皇長子の子孫

四 皇次子及びその子孫

五 その他の皇子孫

六 皇兄弟及びその子孫

七 皇伯叔父及びその子孫

前項各号の皇族がないときは、皇位は、それ以上で、最近親の系統の皇族に、これを伝える。

前二項の場合においては、長系を先にし、同等内では、長を先にする。

**第三條** 皇嗣に、精神若しくは身体の不治の重患があり、又は重大な事故があるときは、皇室会議の議により、前條に定める順序に従つて、皇位継承の順序を変えることができる。

**第四條** 天皇が崩じたときは、皇嗣が、直ちに即位する。

皇位が継承されると明記されているのは「天皇が崩じたとき」のみである。「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」により上皇陛下に限って生前退位或いは譲位が認められた。

#### 第二章 皇族

(省略)

### 第三章 攝政

(省略)

第四章 成年、敬稱、即位の礼、大喪の礼、皇統譜及び陵墓

第二十二條 天皇、皇太子及び皇太孫の成年は、十八年とする。

第二十三條 天皇、皇后、太皇太后及び皇太后の敬稱は、陛下とする。

前項の皇族以外の皇族の敬稱は、殿下とする。

第二十四條 皇位の継承があつたときは、即位の礼を行う。

第二十五條 天皇が崩じたときは、大喪の礼を行う。

即位の礼、大喪の礼を行うことが定められている。行うこと自体が違憲という一切ないが、内容次第では違憲になりうるということは理解していただけるだろう。しかし、この二つの儀式の手順について定めた法律は存在しない。国会で議論されることなく儀式が行われているのが現状である。

第二十六條 天皇及び皇族の身分に関する事項は、これを皇統譜に登録する。

第二十七條 天皇、皇后、太皇太后及び皇太后を葬る所を陵、その

他の皇族を葬る所を墓とし、陵及び墓に関する事項は、これを陵籍及び墓籍に登録する。

第五章 皇室會議

(省略)

## IV. 皇室令

皇室について定めた規則は皇室典範だけではない。このうち旧皇室典範下に存在する法体系を皇室令という。旧皇室典範と同様、帝国議會はこの決定に関与していない。その代表的なものを紹介する。

### ① 登極令

天皇が即位した際に行う儀礼的な行事（改元、即位の礼、大嘗祭）を中心に規定されている。

### ② 立儲令

立太子での儀礼を定めた規則。

### ③ 皇室親族令

親族の範囲、結婚の際の承認や儀礼、親族会について定められている。

### ④ 皇室葬儀令

天皇崩御の際の大喪、皇族の葬儀について定められている。

このように儀礼的なものを始め皇室の様々なことについて明文化されていたのが皇室令である。日本国憲法施行を機に一九四七年五月二日「皇室令及付属法令廃止ノ件」により全てが廃止されている。

## V. まとめ



ただ、宗教的といえる様々な行事が残っていることも事実であり、今後皇室典範の規定下で実際にどのような活動を行っていくかは議論すべき点であるように思う。

そして、女系天皇をはじめとして皇室典範改正も絡む様々な論議が多くされている。

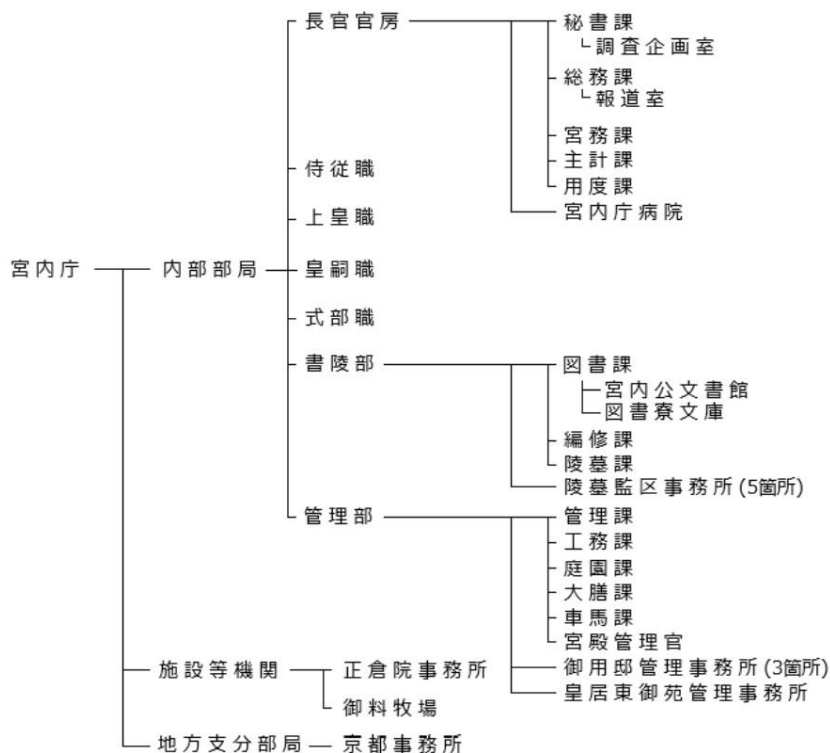
## VI. 参考文献

横田耕一、憲法と天皇制、岩波新書、1990

高尾英司、ドキュメント皇室典範、幻冬舎新書、2019

(中三 S. M.)

図 1 宮内庁の組織図（出典：宮内庁ホームページ）



1  
|  
3  
宮内庁

宮内庁は内閣府の下に置かれ、名の通り皇室に関する仕事を担当する機関である。宮内庁内の組織は図1のようになっており内部部局は1官房2部4職が基盤となっている。ここでは内部部局と施設等機関にあたる御料牧場について触れたい。

## ●長官官房

図1を見ての通り、長官官房のさらに下に5つの課と宮内庁病院があるのが分かる。

秘書課では人事の給与、皇室会議に関することや皇室制度の調査と統計といった幅広い仕事を担っている。

総務課は行幸啓に関することや報道に関することなどを扱っている。報道に関しては報道室が設けられ、マスコミ対応や宮内庁ホームページの仕事を行っている。近頃は誤情報が多く出回るため、正確な情報の指摘をホームページ上で行っている。平成30年には眞子内親王殿下の小室圭氏との婚約に関して当時の皇后さまが発言なさっているとの報道が出回ったが「そのような事実はない」との発表がなされ、現在もホームページで発表を閲覧することができる。

宮務課では常陸宮、三笠宮、高松宮の各宮家に関する事務を、主計課は皇室の予算、皇室経済会議などを担当、用度課では備品や消耗品の管理、また三ノ丸尚蔵館の管理を担当している。三の丸尚蔵館は皇居内にあり皇室に受け継がれた美術品や各宮家の遺贈品が展示されており、だれでも無料で拝観することができる。

宮内庁病院も無論皇居内にあり、各皇族、宮内庁や皇宮警察職員とその家族などが診察を受けることができる。また、宮内庁職員の紹介があれば一般人でも診察できるそうだ。

## ●侍従職

侍従という言葉は古文を知っている人ならおなじみだろうが、一応意味を確認しておく、簡単に言えば身の回りの世話をする人である。そして宮内庁の侍従の仕事については、宮内庁法第4条にお

いて、

一 御璽国璽を保管すること。

二 側近に関すること。

三 内廷にある皇族に関すること。

と定められている。御璽は法律や政令の公布文や条約の調印書などに押印されるもので、国璽は日本国を表す印のことだ。侍従次長・侍従・女官長・女官・侍医長・侍医といった職員が侍従長のもとに属す。侍従長・侍従次長は内閣に任命され、侍従・女官・侍医は内閣総理大臣によって任命される。侍医は天皇皇后両陛下の医事を担当しており、やはり東大医学部教授・出身者が多いようだ。これらは宮内庁の職の中でも特別職と呼ばれいわゆる公務員からは一線を画した仕事を行っている。

## ●上皇職・皇嗣職（・東宮職）

かつては東宮職が存在していたが（これも古文を勉強している人には馴染み深いだろうが東宮は皇太子を意味する）、上皇陛下の讓位と、このことによる現在の皇太子空位のため、この2つの職が令和元年5月1日より創設された。上皇は現上皇后両陛下、皇嗣職は秋篠宮家の担当となっている。仕事内容は先述の侍従職の内容で各皇族方の身の世話をするため、侍従職と近いものであるといえる。

ちなみに東宮職については皇位継承に伴い各役職が侍従職のものに昇格するのが一般的となっている。

## ●式部職

式部職は代々皇室に受け継がれてきた儀式や、雅楽、洋楽、鴨場接待、外交交際に関することを担当している。

雅楽・洋楽に関しては式部職に属する宮内庁楽部が担当しており、演奏師は楽師と呼ばれる。雅楽は皇室らしさがうかがえるが、洋楽を演奏するのは少し意外だろう。明治期の入欧風潮の際に洋楽演奏団体にふさわしい楽団を探していたところ、当時まとまっていた楽団として楽部が適切だったため担当することになったといわれている。雅楽については飛鳥時代までその歴史は遡るといわれており、非常に長い伝統だ。そのため、楽部はこの伝統の継承の大きな役割を担っている。かつて、楽師は世襲制であったが現在では採用型となっている。しかし、楽師になるには中学卒業後、楽部楽生科に入り7年の研修の後卒業試験に合格してやつとなれる。雅楽の楽譜は全て五線譜で表されるわけではなく、楽器ごとに異なる。さらに洋楽についてもマスターすることが必要なので鍛錬が非常にシビアだ。ちなみに、雅楽師として有名な東儀秀樹さんもこの宮内庁楽部楽生科で学んでいた。東儀家は奈良時代から楽師を世襲していた家の1つである。

鴨場接待は国内外の賓客の接待の場として使われている。ここでは、鴨の猟が行われており、埼玉県の新潟県と千葉県の新潟鴨場の2カ所が鴨場として使われている。野生の鴨を無傷のまま網で獲る猟に賓客も参加してもらう形となっており、明治時代から続いている。獲った野生の鴨は国際協定に基づいて生態調査を終えた後、全て放鳥される。食肉用は別に飼育されており、鴨すきが賓客にふるまわれる。

また、各国駐日大使の接待には御料鵜飼が行われている。やはり鵜飼で有名な長良川が使用されており、毎年中秋の名月と増水時を

除いた5月11日～10月15日に行われる鵜飼のうち、8回天皇陛下主催の漁（御料鵜飼）が行われ、そのうちのさらに2回が大使接待となっている。大使は鵜飼漁を見ながら川下りをするというもので、そこそこ人気が高いという。この長良川の鵜匠は宮内庁式部職の非常勤職員なのである。

## ●御料牧場

図1の順番からは変わるが流れでこれに触れたいと思う。

御料牧場は簡単に言えば皇室の牧場だが、家畜用もあれば乗馬・鞍馬用の馬も育成されている。かつては成田市にあったが成田空港建設に伴い、栃木県高根沢町・芳賀町に移転し（2町にまたがっている）現在もこの場所にある。ここで飼育・生産されたお肉は皇室のお食事用、また宮中晩餐会用として供給されるが、御料牧場が皇室主催の外交使節団の接待の場、皇室の方々のご静養の場として使用されることも多い。また、野菜の栽培も行われており同様に供給されている。外交使節団の接待の際は、乗馬や場内のサイクリングの後に、鴨場接待と同様にお肉がふるまわれる。家畜というと伝染病がやはり危惧されるが、これらの防止のため一般人はもちろん立ち入り禁止となっている。

## ●書陵部

名前からもある程度予想は付くが書物・陵墓の管理を行っている。

書物に関するものは図書課・編修課が担当している。古文書の整理や修補が主な仕事だが、修補は大変な作業であるという。古文書は年々劣化するため、それを防ぐことが求められる。また、各天皇陛下の実録も製作しており、2014年には「昭和天皇実録」が完成し

た。資料の多くは皇室に関わるもので図書寮文庫と宮内公文書館に保管されており、一般人でも予約すれば閲覧することができる。また、編修課では皇室制度の研究もおこなわれており、「皇室制度史料」を刊行している。

北は山形県から南は鹿児島県まで現在全国で899の陵墓があり、宮内庁が管理している。陵墓管理は5陵墓監区事務所（多摩・桃山・月輪・畝傍・古市）に分けて担当している。多摩は高尾にあり、昭和天皇陵・大正天皇陵が有名であり、月輪・桃山は京都、畝傍は奈良にある。古市は百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されたことでも有名だが大阪にある。畝傍には初代天皇の神武天皇陵があり、筆者も修学旅行で訪れたことがある（もちろん中には入れなかった）。陵墓課は陵墓に関する調査もしており、出土された考古品も多く所蔵している。

## ●管理部

図1を見ても分かる通り、管理部には多くの課があるため、1つの紹介は厳しいのでここでは車馬課・庭園課・大膳課のみ詳しく扱う。

とは言っても他の課に何も触れないわけにはいかないので簡単に説明しておく、管理課は庁舎の清掃や皇居の景観の整備、工務課は建築・土木に関わることや生活必需の電気・水道・ガスを担当している。宮殿管理官は皇居の管理に関する事務、御用邸管理事務所・皇居東御苑管理事務所は名の通りそれぞれ、須崎・葉山・那須御用邸の管理、皇居東御苑の管理を担当している。

### （1）車馬課

車馬課も名の通り、皇室の使用される車・馬の管理を行っている。天皇陛下の御料車は品川ナンバーのものと皇ナンバーのものがあ、り、公的なお出ましには皇ナンバーのものが、その他のお出ましには品川ナンバーのものが使用され、公私を分けて使用されている。ちなみに現在御料車にはトヨタ・センチュリーが使用されている。皇室の車のご利用というと昨年度の天皇陛下の「即位の礼」でのパレードが記憶に新しい。ここでは皇ナンバーのものが使用された。御料車の運転手はかなり高い運転技術をもちろん求められ、厳しい試験を通過して採用される。

また、馬についてはほとんどが先述の御料牧場産で、各種祭祀・信任状奉呈式に使用される。信任状奉呈式は新任大使が信任状を天皇陛下に奉呈する儀式で大使は馬車と車の使用を選択できるが、馬車の使用の方が多い。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響で、6月のトンガとルワンダの新大使就任の際には車が使用された。古式馬術に使用する馬も車馬課の管理であり特別な調教を馬に施している。古式馬術には母衣引きと打毬がありどちらもなかなか面白いもので気になる人はぜひ見てほしい（宮内庁が紹介ビデオを公開している）。

<https://www.kunaicho.go.jp/culture/bajutsu/koshikibajutsu-mov.html>。

### （2）庭園課

皇居は23区内でも緑が多い場所です。都会のオアシスとも呼ばれているが、この皇居・赤坂御用池の庭園、そして盆栽を担当しているのが庭園課である。盆栽については宮殿内にあるものを宮内庁ホーム

ページで閲覧できるが、庭園課の仕事としての盆栽の手入れの仕事は大変だという。特に正月には春飾りという盆栽が多く必要になるため多忙だそう。数としては1000の盆栽を管理している。盆栽はまさに日本文化なので皇居の盆栽はまさに象徴となっているだろう。

### (3) 大膳課

皇族方のお食事、茶会、国賓を迎えた晩餐会の担当をするのが大膳課である。テレビ的に言えばまさに「天皇の料理番」にあたる。普段は「洋食」「和食」に分かれて担当しているが、晩餐会のような洋食のときは「和食」の係が手助けに、その逆も然りということのようだ。

また、国会議員や最高裁判所判事なども参加する園遊会は毎年「焼き鳥・サンドウィッチ・ジンギスカン・日本酒・紅茶」などと提供するものが決まっているが(ジンギスカンは特に美味らしい)、何せ約2000人が参加するため提供量が多いのでこのときも係を超えて助け合い、有名ホテルに協力を依頼することもあるという。

普段の皇族方の食事は贅沢なものかと思われがちだが、質素だという。食材は先述の御料牧場産のものが多く、魚や果物は外部に委託する。献立は栄養面も鑑みて担当侍医とも話し合って決め、担当侍医は出来上がったお食事をチェックする。召し上がるお食事の量も健康チェックの一環であるため、しつかり管理がなされている。

### ●やういふ・参考文献

宮内庁の仕事の情報は宮内庁のホームページ以外にネット上にはなかなか載っていないため、知る機会が少ないがこの文章が少しで

も知る機会となれば幸いである。

### ※参考文献

- ・久能靖「知られざる皇室 伝統行事から宮内庁の仕事まで」河出書房新社 2019年
- ・椎谷哲夫「皇室入門」 幻冬舎新書 2018年
- ・宮内庁ホームページ (<https://www.kunaicho.go.jp/>)
- ・東洋経済オンライン「大公開！これが「天皇の料理番」の実像だ」(<https://toyokeizai.net/articles/-/67620?page=3>)
- ・テレ朝ニュース「コロナ禍で信任状捧呈式も様変わり 馬車使わず車で」

([https://news.tv-](https://news.tv-asahi.co.jp/news_society/articles/000186900.html)

[asahi.co.jp/news\\_society/articles/000186900.html](https://news.tv-asahi.co.jp/news_society/articles/000186900.html))

※ネットの情報の最終閲覧日は全て令和2年9月29日です。

(高二 K・M.)

# 1-4 その他の関係組織

## I. はじめに

ここでは、宮内庁以外の関係組織、会議である皇室経済会議、皇室会議、皇宮警察本部について触れたい。

## II. 予算

すべての皇室財産は、国に帰属しており、また、皇室の費用は、予算に計上して国会の議決を経る必要がある。予算に計上する皇室の費用には、内廷費・皇族費・宮廷費などがある。

### 内廷費

天皇・内廷にある皇族の日常の費用その他内廷諸費に充てるもので、法律により定額が定められ、令和2年度は、3億2,400万円です。

### 皇族費

皇族としての品位保持の資に充てるためのもので、各宮家の皇族に対し年額により支出されます。

皇族費の基礎となる定額は法律により定められ、令和2年度の皇族費の総額は、2億6,932万円です。

なお、皇族費には、皇族が初めて独立の生計を営む際に一時金として支出されるものと皇族がその身分を離れる際に一時金として支出されるものもあります。

### 宮廷費

儀式、国賓・公賓等の接遇、行幸啓、外国ご訪問など皇室の公的ご活動等に必要な経費、皇室用財産の管理に必要な経費、皇居等の施設の整備に必要な経費などで、令和2年度は、109億8,007万円です。

(宮内庁より)

これらの皇室の予算は皇室経済会議と呼ばれる会議によって決まる。衆参両院の議長・副議長、内閣総理大臣、財務大臣、宮内庁長官、会計検査院長の8人の議員と8人の予備議員から構成されている。

審議事項は

- 内廷費・皇族費の定額の変更(皇室経済法第4条・第9条)

- 独立の生計を営むことの認定(同法第9条)

- 皇族の身分離脱の際の一時金額の認定(同法第6条)

(宮内庁より)

などがある。

## III. 皇室会議

皇室経済会議の他に皇室会議というものがある。名前が紛らわしいが違いとしては、予算ではなく、皇室の制度に関する会議といえる。皇族3名、衆参両院の議長・副議長、内閣総理大臣、宮内庁長官、最高裁判所長官・同判事1人から構成されている。

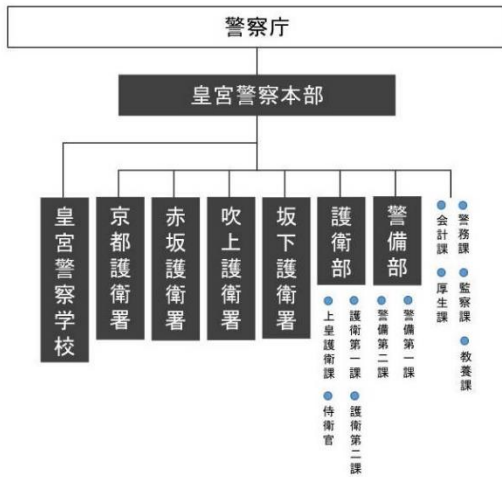
審議事項は

- 皇位継承の順序変更(皇室典範第3条)

- 立后と皇族男子のご婚姻（同第10条）
  - 皇族の身分の離脱（同第2条・第13条・第14条）
  - 摂政の設置・廃止（同第16条・第20条）
  - 摂政の順序の変更（同第18条）
- などがある。平成26年の皇室会議では天皇陛下下の退位に関する皇室典範特例法が議題となった。

## IV. 皇宮警察本部

皇宮警察本部は、警察庁の下に置かれている、天皇皇后両陛下や皇族各殿下の護衛と皇居、御所、御用邸などの警備を専門に行う警察である。1886年に宮内省に皇宮護衛署として発足し1954年の新警察法制定によって皇宮警察本部として現在まで天皇皇后両陛下及び皇族の警護を務めている。



- ・ 組織
  - 皇宮警察本部長のもとに警備部、護衛部を中心とした組織で成り立っている。
- ・ 主な事件

左翼過激派による反皇室闘争が激化していた1970年代に坂下門乱入事件やひめゆりの塔事件が起きたが、皇宮警察官の対応により皇族が傷害を受けるということは無かった。

### 参考

『皇宮警察』久能靖 2017

皇室会議 議事概要

<https://www.kunaicho.go.jp/news/pdf/koshitsukaigi.pdf>

宮内庁

<https://www.kunaicho.go.jp/>

皇宮警察本部

<https://www.npa.go.jp/kougu/>

(中三 H. T.)

## 第二章 天皇制の歴史

### 2-1 古代

題は天皇家の歴史ではあるが要は日本史である。

#### I. 天皇家の祖

記紀において初代天皇は「神武天皇」であるとされ、さらに彼は神の子孫だという。ちゃんと書いても科学的に作り話と考える方が妥当ながら、一応神話を紹介する。←

まず、混沌としていた世界が或る時、陰と陽とに分かれ、天地とな

った。さらに天上界（勿論天とは別の場所）の高天原に三神が現れ、

「イザナギ・「イザナミ」という兄妹を生んだ。彼らは（兄妹なのに）

交わり、とよみはらみすまのくに豊葦原瑞穂国をつくった。そして此れが日本列島である。其

の後も二柱は（兄妹なのに）神々を産んでいくが、火の神を産んだ時に、「イザナミ」は性器を焼かれて亡くなった。其の後「イザナギ」が黄泉の国（要するにあの世）からの「イザナミ」奪還に失敗し禊を行った時に「アマテラス」・「ツクヨミ」・「スサノオ」等が生まれ、そして「イザナギ」は高天原の統治を「アマテラス」に任せた。一方弟の「スサノオ」は所謂暴れん坊であったため天上界から追放され、豊

葦原瑞穂国の出雲に降臨し、さらに現地で嚙ませ役の「ヤマトノオロチ」を退治し、「スサノオ」の子孫の「オオクニヌシ」が豊：国の支配者となった。しかし、「アマテラス」は自分の孫の「ヒノホニギ」に三種の神器を与えた上で豊葦原瑞穂国の統治を命じ、日向に降臨させた。これは天孫降臨と呼ばれる。そして、「ニニギ」は「オオクニヌシ」から統治権を回収し（国譲り）、「ニニギ」から数えて四代目にあたるのが「神武天皇」であるというのだ。

以上がざっくり神話であるが、正直僕も信じてないから興味も湧かず（大変申し訳ないが）きちんとした理解が出来ている自信もない。それはさておき「神武天皇」は127歳で亡くなったという設定など無理あるものが多い。此れには中国における辛酉革命説に合わせて神

武天皇が辛酉かのととの年に即位したとするための設定だろう。因みに日本

書紀によると「神武天皇」の在位期間は第百二十四代「昭和天皇」さ

えも超えて、76年。なんと第六代「孝安天皇」の在位期間は102年と

いう。皇室をより古く、権威あるものと主張するための設定と考えるべきだろう。しかし、これだけでは否定するには弱い。何せ本当に存在しないのならば年齢をもっと現実性を高めて設定するだろう。しかし、そうしないのは、「神武天皇」を辛酉の年に即位させ、そして代数はそのままにするためだったのではないだろうか、と考えられるのである。存在の否定は嘘っぱいだけでは成しえないのだ。ど



ちらにせよ、此の長寿数字は作り物であろう。教育勅語が「我が皇祖  
皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ」と教えていたのは宜しく無い。

さて、記紀はその編纂の際に資料として帝紀と旧辞を用いたとい  
う。一般的に帝紀はその天皇の年齢や宮・子孫・墓等について、旧辞  
は天皇の事績について書かれていたと考えられている。しかし、第  
二代「綏靖天皇」から第九代の「開化天皇」迄の八人の天皇について  
旧辞から来る記述が殆ど無いのである。従って彼らは史的な情報に  
欠けると書いて闕史八代と呼ばれる。さらに彼等は全員父から子へ  
皇位を継いでいる。しかし、後の実在の明らかな時代には兄弟間の  
皇位継承は屢々見られる事である。そして、よく言われるのが彼ら  
の内の何人かの諡号について、明らかに後世に生まれた特徴が視ら  
れると云うのである。僕にはよくわからないのだが、例えば第七代  
「孝靈天皇」の「オホヤマトネコヒコフトニ」や、「開化天皇」の「ワ  
カヤマトネコヒコオホビビ」に於ける「ヤマトネコヒコ」は後の第四  
十一代「持統天皇」や第四十四代「元明天皇」等の「ヤマトネコ」に  
類似している。他にも色々と類似点が在ると云うが、紹介しきれな  
い。申し訳ないが割愛させて頂く。  
尚、一般的に此の八人は実在しないとされる事が多い。

因みに先述の帝紀・旧辞は共に現存しない。

乙巳の変にて「蘇我蝦夷」邸が焼けたときに、「厩戸皇子」と「蘇我  
馬子」に編纂されたという歴史書の国記と天皇記が失われたとい  
うが、此れには何が載っていたのだろう。今となつては知り得ないが  
帝紀・旧辞と共に気になる。

一応本章の時代の、第一く九代天皇の名前だけ記しておく。

#### ○本項の時代の天皇一覽○

第一代	神武天皇
第二代	綏靖天皇
第三代	安寧天皇
第四代	懿德天皇
第五代	孝昭天皇
第六代	孝安天皇
第七代	孝靈天皇
第八代	孝元天皇

## II. 崇神天皇

第十代「崇神天皇」<sup>すじん</sup>。彼は日本書紀に「御肇国天皇」<sup>みはつこくすめらみこと</sup>とあり、彼が初代天皇であることを示すとも考え得る。但し、「神武天皇」も同様の名前で呼ばれている事もあり、王朝交替説（天皇家が一度途絶えた）や「神武天皇」と「崇神天皇」が同一人物だという説、「崇神天皇」の四道將軍派遣とは「崇神天皇」の時代に近畿から其の外側へと勢力を広げた事を示唆しているのでは、という説等推測が絶えない。

しかもこの四將軍のうちの一人「大彦」<sup>おほひこ</sup>について、国宝稻荷山古墳（埼玉県行田市）出土鉄剣に見える「意富比埴」<sup>おほひこ</sup>と同一人物という見方が広まっており、更には彼の後八代が皆天皇家に仕えているという。此れだけで彼の実在を述べるには材料が乏しいが、「崇神天皇」の四道將軍の伝説は471年（銘文より）当時既に世間に広まっていたと考えられる。此れは帝紀の内容の推測材料となっているのだが此れは又別の話。併し、「崇神天皇」については將軍の派遣など旧辞的記述も見られる事から、實在説が強く、真の初代天皇候補の一人である。

彼の旧辞的記述について他に例を挙げると、前述の將軍派遣の他に戸口調査や調役（税制の一つ）の整備、灌漑事業、さらには三輪山

を神格化したのも「崇神天皇」だとか。  
ただ残念なのは其の頃の中国の文献に日本／倭は登場しないのである。日本史においては何度も大陸から孤立する時期があつたが、これもその一部。

次に天皇家がいつ頃に大和に一豪族としての立場を確立したのか。先程迄の話は全て推測に過ぎなかったが、一度科学的見地から考える。

先ず大和地方の古墳について、副葬品として出土する鏡のほぼ全てが後漢（220〜）以降の製作と考えられるのだ。一方前漢（〜後8）の鏡は殆ど見つからないという。するとそもそも大和地方で古墳を造れる程発達した豪族は少なくとも三世紀以降の発祥と考えるのが妥当だろう。それらの古墳に埋葬されているのが天皇家であるかは不明だが、早くとも其の頃そして、新羅本紀に見られる、364年に倭が朝鮮半島へ侵攻したという記述と、記紀に於ける「神功皇后」<sup>じんくこうごう</sup>の新羅征伐を同じ物と考えると（勿論僕はさっぱり記紀の年号記述を信用していないとはつきり記しておく）、天皇家が西日本を概ね制圧し終えたのが四世紀前半だろう。

そして、崇神天皇陵と考えられる行燈山古墳（奈良県天理市）は四世紀前半の築造と考えられている事から此れを王墓と考えても特に矛盾はない。

最古の前方後円墳と考えられて居るのが箸墓古墳（奈良県桜井市）

で、一般的に3世紀中葉から後半の築造と考えられている。そして此の間の数十年で古墳の作り方が同じという事について従来の研究では同一墳墓形式の継承は即ち首長権の継承儀礼を含む儀礼を伴った同一葬制の継承であると考えられてきた。とすると同時期に古墳が大量発生したことは首長権の継承、つまりは政治圏を共にしたと考えることも出来るだろう。倭国が纏まる段階で前方後円墳が現れ前述の前方後円墳秩序が広まり、「崇神天皇」治世で其れが整い、ヤマト王権が成立した、と考えられまいか。そしてその箸墓古墳の由来は日本書紀の崇神紀に書いてあるのだ。若しこの考えが正しければ此の位置で前方後円墳の起源に触れるのは必至ではなかったのだろうか。併し、此の考え方に於いて「崇神天皇」治世以前に存在したと考える、つまり前方後円墳の全国展開を速やかに行わせた政治圏が何者であるか、何とも言えないのが正直な所である。

本章に登場したのは「崇神天皇」位だから最後に書く必要もないだろうが、見栄えを考えて一応本項の時代の天皇一覧。

### ○本項の時代の天皇一覧○

#### 第十代 崇神天皇

## Ⅲ. 邪馬台国から鉄剣まで

この時代を考える上で、どうしても気になるのが邪馬台国と纏向

遺跡(奈良県桜井市)ではないだろうか。

これについて日本書紀では第十四代天皇「仲哀天皇」の皇后「神

功皇后」を「倭女王」とし、魏志倭人伝の「卑弥呼」を充てている。

しかし、未婚の「卑弥呼」に皇后を充てる事はまずおかしい。とする  
と天皇を一人女性にするという事は無理だったと推測できないだろ  
うか。つまり、ヤマト王権にはかつて女性君主が存在したといった  
伝承は存在せず、無理に結びつけた結果神功皇后が生まれたのだ。  
とすると、記紀の「神功皇后」の新羅攻めは一体誰の手によって行わ  
れたのか。或いは記紀でも参考にされたであろう新羅本紀が間違っ  
ているのか。ウィキソースってこういうのが結構沢山見られるから  
軽い興味位なら便利。どうせこういう文を書く人に悪い人なんてそ  
ういないだろうし。

そして纏向遺跡だが、纏向遺跡には箸墓古墳に代表される初期の  
前方後円墳が存在する。纏向遺跡の建設ラッシュは三世紀前半に起  
こるが、四世紀前半に突然出土品が激減する。此の事から良く囁か  
れる纏向遺跡がヤマト王権発祥地にして最初の宮都であるというの  
は考えにくい。

さて、「卑弥呼」も中国史からの登場ではあるが、卑弥呼の朝貢し  
たのは三国時代の魏で、其の後中国では五胡十六国の分裂時代が訪  
れる。此の時代の日中関係は殆ど資料が残っておらず現存する物と

しては、石上神宮に伝わる七支刀が知られている。銘文については未解読の部分も残るが、日本書紀神功皇后紀に記された、百濟から倭へと送られたという七支刀と同一の物と見られている。イマイチ倭に届くまでの経緯が不明だが、銘文最初に「泰□四年」というものがあり、この□に何が入るか諸説あり、現在これを中国東晋の太和4年と見る説が有力である。これは西暦に直すと369年である。日本書紀神功紀の記事を全て120年後ろにずらすと概ね史実と内容が整合するといわれるが、正しく七支刀が倭に贈られたとされるのも120年後にずらすと、372年となり、ほぼピッタリなのだ。だから僕は七支刀＝七支刀説を信じている。もう一つ、此の時代の倭を知れる物として、広開土王の碑があるが、此れには触れない。事情により間に合わなかったとしておく。

中国の正史に見える天皇は所謂倭の五王が初出である。倭の五王とは讃・珍・済・興・武の五人である。第二十一代「雄略天皇」は

日本書紀に於いて「大泊瀬幼武」と呼ばれ、さらに、行田市の稲荷山

古墳から出土した金錯銘鉄剣に見られる「獲加多支鹵大王」とも同

一人物とみられる。因みに全国で出土した古墳時代の鉄剣で最も銘文が長いのは此の剣だという。そして、此の「幼武」部分を漢語に直したものが倭王武でないかというのだ。つまり、現在、一般的に雄略天皇と倭王武とは同一人物であると考えられる。倭王武が朝貢の際

に上表した文章とは、あの有名な東は毛人を征すること55箇国、西は衆夷を征すること66箇国、海を渡つて北側も95箇国を征服した、みたいなあの文章だ。巷でも良く知られている「日本武尊」の熊襲討伐や東征、「崇神天皇」の四將軍派遣も此の沢山の国を征服したという史実を創るためのフィクションかも知らない。勿論、「日本武尊」が伊吹山で白鳥になったとかいうのは創作に違いないけれど。

さて、倭の五王だが、「宋書」夷蛮伝(所謂「宋書」倭国伝)等に登場する讃・珍・済・興・武の五人の倭国王で、最初に讃が宋の武帝に朝貢したのは421年、最後に武が宋の順帝に朝貢したのが478年である。此の朝貢の目的について、438年の珍の朝貢について「宋書」夷蛮伝／文帝紀によると、珍は朝貢し、自ら「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王」を自称して、其の称号に除正を求めた。しかし、文帝はそれに対して「安東大將軍倭国王」とだけ任じた。

簡単に言えば、倭王珍は宋に朝鮮半島に対する軍事的支配権を求め、却下された。こういうことを、冊封を求めるといふ。朝鮮半島の支配権をともに求めているのだ。もしかしたら、広開土王碑文や新羅本紀にあるように、本当にヤマト王権は朝鮮に攻め込んでいたかもしれない。さて、倭の五王の内、讃・珍については朝鮮に対する権利を認められなかったが、済の時代に遂に「使持節 都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東將軍 倭国王」の称号を与えられた。百濟を除いた朝鮮半島南部への軍事的支配権が此処

に認められたのである。尚、百済も当時宋に朝貢していた。それ故に外されたのだろう。にしても与える土地の広さが足利家並みである。

続いては、記紀の天皇を倭の五王に比定してみよう。現在試みられる其の判断材料は概ね三つ。一つ目が、名前の音韻の一致性、二つ目が、漢字の形の類似性、三つ目が、「宋書」内の続柄と記紀の系譜の共通性である。例えば倭王武は「雄略天皇」であると考えらえるのだが、「雄略天皇」のワカタケルと武(タケルと読める)には類似性を言えよう。他の王についても見てみると、讃については、第十六代

「仁徳天皇」のサザキ、第十五代「応神天皇」のホムタ(訓読みから)の何れかであると考えられる。一方で「宋書」夷蛮伝では讃には兄弟

がいる。それを記紀の系図と照らし合わせると第十七代「履中天皇」

がそれに当てはまる。同様に珍について考えると、第十八代「反正天

皇」の瑞齒別ミツハワケの瑞と珍の字形の類似がいえる。又、珍は「宋書」夷蛮

伝に於いて讃の弟とされるが、記紀の系図でも彼には兄「履中天皇」がいる。珍として最も可能性の高い人物は「反正天皇」であるが、しかし彼が珍であると、其の時に「履中天皇」が讃である可能性がとて高い。だから「反正天皇」が珍であるとは言い切れないのだ。済については、音韻説は弱いが、「宋書」孝武帝本紀によれば済は興の父であり、更には「宋書」夷蛮伝には武が興の弟との記述がある。此れ

を記紀の系図と照らし合わせると、第十九代「允恭天皇」の子には

天皇が二人。兄は第二十代「安康天皇」。弟は例の「雄略天皇」なのである。特に同時代に同じような系統の天皇もいないから、済は「允恭天皇」でないか、とするのが有力である。同様に興も「安康天皇」に比定される事が多い。但し、どちらも「雄略天皇」が武であることを基点としており、当選確実の花が添えられるには証拠が不足している事は明らか。

但し、武は音韻からも系譜からも「雄略天皇」と考えられ、有力な他の候補もないので、間違いないと言ってもそろそろ過言ではない。

さて、彼らは宋に朝貢していたのだが、其の後宋は滅亡し、代わりに齊が建った。

彼等は朝貢の際に自らの称号を求めていたが、同時に配下の豪族に対する其れも求めていた。とすると、彼等は朝鮮への支配権を、国内地位をより安定させるために用いたと考えられる。

齊の建国以降に倭が齊に遣使したのは一回だけであるから、倭は齊に自らの権力を保障する基盤となり得る力を見いだせなかったのだろう。そして、この後実在すら疑問視される事もある天皇が何人か続く。そして、第二十五代「武烈天皇」代に於いて遂に「仁徳天皇」の血筋が途絶えるのだ。が、此れはもう少し後に書くことになる。

○本項の時代の天皇一覧○

第十一代 垂仁天皇すいにん

第十二代 景行天皇けいこう

第十三代 成務天皇せいむ

第十四代 仲哀天皇

第十五代 応神天皇

第十六代 仁德天皇

第十七代 履中天皇

第十八代 反正天皇

第十九代 允恭天皇

第二十代 安康天皇

第二十一代 雄略天皇

第二十二代 清寧天皇せいねい

第二十三代 顕宗天皇けんぞう

第二十四代 仁賢天皇にんけん

第二十五代 武烈天皇

## IV. 遷都・遷宮

先述の鉄剣では「雄略天皇」の都は「斯鬼宮」しきのみやとされている。しか

し、例えば古事記では「長谷朝倉宮」はせあさくらのみやとされ、さらには天皇の代替わ

りの度に都が遷されている。例えば「反正天皇」代は「多治比柴垣宮」たじひしがきのみや、

「允恭天皇」代は「遠飛鳥宮」とおつあすかのみや、「安康天皇」代は「石上穴穗宮」いそのかみあなほのみやと

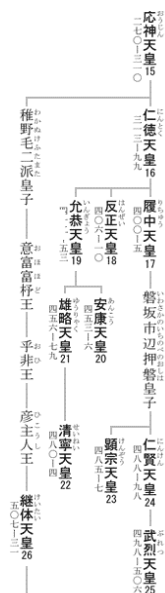
なっている。確かに代毎に変わっているだろう。一般的にこれは父子間別居の慣例があったか、或いは新天皇が即位したときの慣例事であろう。

さて、本拠地たる宮都が代毎に変わり、更には一か所に留まることもないという事は、大王は一か所に留まって政治を執り行う必要が無かった、ということだろう。暫く後、磐余に都が集中する時期があり、蘇我氏が勢力を伸ばすと、其の本拠地たる飛鳥に宮都が連続した。蘇我氏の時代まで制度が変わっていないなら、有力豪族に決定権があったのかもしれない。さらにはその時々、適所に天皇も遷都していたと考えても全く矛盾無いのでは。

○本項の時代の天皇○

V.  
伽耶諸国

以下、宮内庁ホームページより。



「大伴金村」や「物部麿鹿火」といった豪族が徳川御三家並みの血

「滝川一益」は太閤の、  
「荻生徂徠」は物部氏の子孫であると言わ

さて、引つ張られてきた「男大迹」だが（迹は漢検一級レベルの字らしく、僕も読めなかった。普通、「あと」とか読むらしい）、話の流れからわかるように彼こそが第二十六代「継体天皇」である。

さて、日本書紀の継体紀のメインは朝鮮半島関連の記事だが、嘗

一方、伽耶諸国は東側の新羅からも侵略を受けており、継体天皇は新羅に奪われた地域の回復の為、「近江毛野」に六万の兵を付けて

派遣した。新羅はこれに対抗すべく、筑紫周辺の豪族「磐井いわい」に貸賂まいなれ

（支援）を与えて皇軍の行軍の妨害をさせた。これにより、ヤマト王権の外交網は遮断された。中央から「物部麁鹿火」が派遣され、此の反乱は鎮圧されたが、遂に伽耶の復興に失敗した。

尚、「隋書」倭国伝によれば、この頃には既に地方統治の為にくのみやつこ国造・稻置いなぎが設置された。

## ○本項の時代の天皇一覽○

### 第二十六代 継体天皇

## VI. 蘇我氏の登場

此の時代の豪族について、臣・連おみむらじといった称号を有するケースが多い。当時、姓は王権に仕える有力豪族のみが名乗り、さらに臣は主に大和盆地の西部に根を張っている、王権が連合国家的だった頃の構成豪族で、連は大和盆地西部に本拠を置く、王権の直接の配下だった豪族である。尚、臣系豪族は其の本拠地名を、連系豪族は其の職名を姓としている氏が多い。又、大臣・大連とはそれぞれのトップである。

例えば既に名前の挙がった大伴・物部の両氏は大連を受け継ぐ家である。さて、話題の蘇我氏であるが、第二十八代「宣化天皇」せんか治世

に「蘇我稻目」そがのいなめが大臣に任命される辺りからだろう。彼は天皇の直轄

地たる屯倉みやけを特に大和・吉備に於いて増設し、更に自らもそれらの

一部の経営にあたり、現在の橿原市見瀬町辺りにある大身狭屯倉・

小身狭屯倉こみさのの成功は良く知られる。水田の灌漑を整備したり、牛耕を採用したりして、王権の財源確保に大きく貢献した。

又、「稻目」は、第二十九代「欽明天皇」きんめいに、二人の娘、「堅塩媛」きたしひめ

と「小姉君」おあねのきみを嫁がせた。彼女等は沢山の子を産み、蘇我氏は此の後に全盛期を迎えるのだ。

ちようどそのころ、以前から渡来人の間で信仰されていた仏教が、百済から公式にもたらされた。蘇我氏は東漢氏等の渡来系氏族との関係が深く、その関係もあつて大陸文化を採り入れることに意欲的で、仏教を取入れることにも積極的であつた。故に蘇我氏と物部氏や中臣氏といった仏教の導入に反対する氏族との間に対立構図が生まれたのは言うまでもない。「欽明天皇」治世の物部氏の当主は

「物部尾輿」もののべのおこしで彼もまた大連だった。この争いは彼等の子の代まで

続く。但し、歴史は勝者が歪めるといふように、日本書紀などに残る当時の記録は蘇我氏の伝えたものに過ぎず、余り信用できないのだ



が。

日本書紀では、「稲目」は伝来した仏像の一つを譲り受け、自らの屋敷を寺に作り替えて仏教を信仰したという。

「欽明天皇」が崩御すると、第三十代「敏達天皇」が即位した。大臣には「稲目」の子の「蘇我馬子」が、大連には「尾輿」の子の「物部守屋」が其々任命された。

敏達天皇14年、「蘇我馬子」が盛大な仏会を開き、仏舍利を埋めた。其の後、疫病が広まり、「馬子」自身も罹患した。「物部守屋」と「中臣勝海」は此れを「馬子」の仏教崇拜にあるとし、仏教を迫害した。この頃から両者の対立はエスカレートしていく。

「敏達天皇」が崩御されると、第三十一代「用明天皇」が即位した。「用明天皇」の母「堅塩媛」は蘇我氏の出身で、仏教を信仰していた。「用明天皇」は即位の翌年4月には崩御したが、其の死の間際に三宝興隆の詔を発した。三宝とは仏・法・僧の事である。

これによって皇位奪取の為に物部サイドについていた「穴穂部皇子」は物部氏を裏切り、「守屋」も河内まで退いた。さらに「中臣勝海」は暗殺された。尚、「穴穂部皇子」も間もなく暗殺された。用明天皇2年の7月、「蘇我馬子」は「泊瀬部皇子」(後の崇峻天皇)や「厩

戸皇子」(用明天皇嫡子)と共に「物部守屋」を河内国阿都に攻め、此れを討った。所謂丁未の乱である。此の戦いの後、「蘇我馬子」は飛鳥に法興寺(飛鳥寺)を、「厩戸皇子」は摂津に四天王寺を其々建立したと伝わる。

そして戦いの翌月の8月に「泊瀬部皇子」は第三十二代「崇峻天皇」として即位した。時に西暦587年の事である。此の時代には時代がはつきりしてくるので、元号の導入まで西暦に換算して記述する。彼は当時、「蘇我馬子」の傀儡だったが、大伴氏出身の娘との間に王子を授かっていた。しかし、同じく「崇峻天皇」の妻であった「蘇我馬子」の娘との間に王子はいなかった。大伴氏の再興を懼れた「馬子」は592年11月、「東漢直駒」に命じて「崇峻天皇」を暗殺した。尚、歴代天皇で暗殺されたのは、彼の他に「安康天皇」だけである。それから、「東漢直駒」も直後に暗殺されている。

## ○本項の時代の天皇一覧○

第二十七代 安閑天皇

第二十八代 宣化天皇

第二十九代 欽明天皇

第三十代 敏達天皇

第三十一代 用明天皇

## VII. 推古天皇

592年12月「崇峻天皇」暗殺の後、「欽明天皇」の娘の「額田部皇女」

が第三十三代「推古天皇」として即位された。尚、彼女は日本史上初の女性天皇である。

さて、他にも多くの男性天皇家が（兄弟にも）いたにも拘わらず、彼女が即位した理由について、まず彼女が「敏達天皇」の<sup>おおききい</sup>大后（後の皇后、わかりにくいから以降は皇后と書く）であり、さらには「崇峻天皇」擁立等に関わる政治的手腕の持ち主であり、更には皇后が受け継ぐ財産について、「用明天皇」には皇后がいたものの彼が短期間で崩御し、「崇峻天皇」は皇后がいなかったので彼女は強い財政基盤を未だ掌中に収めていたのだ。それに皇位継承争いを天皇家内で起こされるわけにもいかず女性だからこそその緩衝に適任と判断されたのだろう。此れ以降も皇位継承に重大な問題（が起こるリスク）がある場合には女性が天皇になる事が屢々あった。

当時の王宮は奈良盆地東南部の磐余地域に集中していたが、倭漢（東漢）氏や、蘇我氏が既に飛鳥への進出を開始していたからか、彼女は奈良盆地飛鳥に都を設けた。豊浦宮である。磐余は大和川の水

運を利用できる位置にあり、更に其処には山辺の道の起点として知

られる海石榴市<sup>つばいち</sup>がある。大和川に面する海石榴市には河港があり、

交通の要衝として賑わっていた。

一方の飛鳥は大きな道と言えば紀路ぐらいいしか通っておらず、これまた海石榴市を起点に飛鳥を経て紀ノ川の河口付近へと走る道だった。飛鳥はどちらかという鎌倉の様に山に囲まれた防衛向きの都市ではある。

勿論、飛鳥に都が出来れば道も増えるもので、阿倍山田道という道路が磐余―飛鳥間に造られたようだ。勿論、こんな時代の道、良くて石が敷いてあるくらいで、アスファルト舗装なんてされてないけれど。阿倍とは安倍文珠院の事の様で、現在地に阿倍寺が移ったのが鎌倉時代、文珠院が建ったのは16世紀の「松永久秀」の南都焼き討ちの後の事のように。とするとこのネーミングは後世になってついたものだろう。そして、飛鳥石神遺跡では関司を意味する「勢岐官<sup>せきのつかさ</sup>」と記された木簡が出土しており、此の事からこの道には関所があった可能性がある。

さて、推古朝というと、やはり「厩戸皇子」、所謂「聖德太子」がよく知られる。そもそも彼は「堅塩媛」の子「用明天皇」と「小姉君」の子「穴穗部間人皇女」の間に生まれた子であり、しかも「蘇我馬子」を舅に持った彼は蘇我氏の血を特に濃く受け継いでいた。彼は

一人の皇位継承候補として、「推古天皇」の補佐という形で、「蘇我馬子」と共に政を執り行つた。又、「厩戸皇子」が皇太子・摂政だったとよく言われるが、皇太子はもつと後の時代に設けられたもので、飽くまでも候補であつた。又、日本書紀は漢文で書かれているので、其の記述を訳したときに摂政になつたと読むか、政を録撰すると読むか諸説在り、はっきりと摂政に就いたとは断言できないのが現状である。日本書紀は話題の時代に存在しない、後の時代の言葉を用いる事があり、例えば「厩戸皇子」も其の時代に無い皇太子の言葉で説明されているが、摂政も同様のパターンであるかもわからない。

そして彼は他にも幾つかの呼び名を持っている。例えば南かみつみやの上殿で

育てられたから「上宮王」かみつみやおう、聡明であつから「豊聰耳」、そして死後

に法主として仰がれる所謂太子信仰の中で生まれた「聖徳太子」の名が主であろう。彼はお札の肖像画としても描かれたことがある。

彼は此の後、有名な「冠位十二階」(603年12月制定)や「17条の憲法」(604年4月制定)を定めたのだが、まあ義務教育にここは任せようかと思う。

更に600年には隋へ使いを派遣した。使者は隋の文帝の問いに対して倭の風俗を問われ、倭国における太陽神への信仰と、未明に政治を行う習慣について回答した。文帝もこれには驚いたか、呆れたか。真意は兎も角、隋の政治制度を教えたという。

しかし豊浦宮は東に飛鳥川、西に大野丘こと丘陵地を抱えていた

為、どうしても小規模な都と成らざるを得ず、隋を参考にするにも限界があつた。そこで、603年10月「推古天皇」は宮都を飛鳥川の西岸から東岸の小墾田宮おはりだのへと遷した。

同時期に「厩戸皇子」が階級制度を整えていた為、小墾田宮から宮殿の構造が整えられたと考えられる。そして17条の憲法にも見えるように毎朝の、朝参・朝礼・朝政が実施されるようになった。こうして毎日天皇にきちんと礼をすること、天皇への尊敬心が自然と根付いたのだろうか、とも思う。天皇が神聖化されていくのは更に少し後の時代だ。しかし、こうして官人制度の礎がこの時代に出来上がった事は一つの成果と言える。

607年には再び第二回遣隋使として「小野妹子」おののいもこ等が派遣され、有

名な「日出處天子致書日没處天子……」との国書を隋の「煬帝」ようたいへ伝

えた。「煬帝」を激怒こそさせたものの、勅使「裴世清」はいせいせいを連れて「小

野妹子」は帰還する。尚、此の朝貢に冊封関係は無かつた。此の後も毎年のライシンのやり取りでの遠距離恋愛ではなく遣隋使の派遣は続き、更に三回派遣された。

各種大陸文化を採り入れる事が目的だろうか。

「厩戸皇子」は605年10月、斑鳩宮いかるがを造営、自身は其処に遷つた。

大臣「蘇我馬子」との間に政治的な確執が生じたのか、イマイチわからない所はあるが、彼は以降政治の表舞台に姿を見せなくなった。これが日本書紀に記述の無いだけか判然としないが、斑鳩は大和川水系の結節点に近く、遣隋使等の発着含め国際港化しつつあった難波津へのアクセスにも優れ、又、太子道と呼ばれる道で飛鳥とも直接繋がっていた(勿論、舟運でのアクセスも可能)点で非常に交通の便に優れた地であったことは事実である。彼は622年に亡くなった。

626年、「蘇我馬子」は死去。ほぼ間違いなく彼は石舞台古墳に祀られたとされる。石舞台古墳は、既にその地にあった群集墓を破壊して造られた特異的な古墳であるが、現在では封土が全て失われ、石室が残るも、盗掘によつて室内の副葬品などは不明である。

そして、628年4月、「推古天皇」も崩御なされた。

## ○本項の時代の天皇一覽○

第三十三代 推古天皇

## VIII. 乙巳の変

629年2月、第三十四代「舒明天皇」が即位された。「蘇我馬子」の

息子、大臣「蘇我蝦夷」が彼を天皇に立てたのだ。彼は「敏達天皇」の直系であり、「厩戸皇子」の息子「山背大兄王」との間に皇位継承争いを持っていたと考えられている。しかし、「蝦夷」は蘇我氏との血縁関係の濃い「山背大兄王」を敢えて選ばない事で論争の深刻化を防ごうとしたのではないだろうか。

そして、「舒明天皇」は、10月に飛鳥岡本宮へ遷った。現在の明日香村岡の辺りに広がる所謂飛鳥京跡の下層部に存在したと考えられるが詳細は不明。

其の後も636年6月に田中宮、640年4月に厩坂宮、同年12月に百濟宮に入った。田中宮・厩坂宮は飛鳥の地域内にあるのに対し、百濟宮は磐余の地域内にあるのだ。これは「舒明天皇」が蘇我氏との間に距離を取ろうとした、と考えられる。

が、「舒明天皇」は641年10月には崩御した。

642年2月、「舒明天皇」の太后、つまりは皇后であった「宝皇女」

が第三十五代「皇極天皇」として即位。「蘇我蝦夷」は、「蘇我馬子」が他の男性天皇家を差し置いて「推古天皇」を即位させた例にあやかって、彼女を即位させたのだろう。史上二人目の女帝である。

「舒明天皇」と同様にどこで即位したかは伝わらないが、同年12月には小墾田宮へ、643年4月に飛鳥板蓋宮へ遷った。板蓋宮は先述の飛鳥京跡の中層、岡本宮の跡地に建てられたと考えられている。それはさておき、「蝦夷」の子の「蘇我入鹿」が此の頃急速に権力を集めるようになった。或る時、蝦夷が病を患った。彼は自邸で「入鹿」と其の弟を大臣に任じ、更には「入鹿」に紫の冠を授けた。紫の冠は冠位十二階に於いて最高位であり、そもそも冠位は天皇が授ける物であった。

さらに「入鹿」は「皇極天皇」を廃位に追い込み、「舒明天皇」と「蘇我蝦夷」の娘の「蘇我法提郎媛」との間に生まれた「古人大兄王」を皇位に付けようと画策した。其処で、「入鹿」は皇位継承ライバルの「山背大兄王」を攻め、滅ぼした。

此れに危機感を抱いたのが「中大兄皇子」である。彼は講義に通う途中に「中臣鎌足」と作戦を練ったという。尚此の講義を行っていたのは遣隋使に学僧として随伴した経験を持つ「南淵請安」である。更に彼らは「入鹿」の従兄弟の「蘇我倉山田石川麻呂」等を仲間に加えて共に「入鹿」討滅の算段を練った。

そして、三韓から使いがやってきた645年7月10日、遂にそれは実

行に移された。三韓からの「皇極天皇」への上表文を「石川麻呂」に読ませ、その間に同席している「入鹿」へ「佐伯子麻呂・稚犬養網田」の二人が斬りかかる予定だった。女装して事前に「入鹿」の護身用の刀を奪い、「中大兄皇子」自ら槍を持ち、「中臣鎌足」も弓を持って隠れた。

しかし、いざ決行の時、実行役の二人は怖気付き、一向に斬りかからうとしない。「石川麻呂」も怯えて震えだした。「入鹿」は「石川麻呂」に尋ねる。

「何故震えておられる」

「大王の御前にして、畏れ多くて」

その時「中大兄皇子」自ら「入鹿」に斬りかかった。其処で漸く彼等も動き出す。「入鹿」は斃れながらに「皇極天皇」に問う。

「私に何の罪があるのです、どうかお裁きを」

事前に知らされていなかった「皇極天皇」も驚き、そして尋ねた。

「何をするの、一体どうしたのですか」

「入鹿は山背大兄王を討ち、さらには自ら天皇になろうとしているが、入鹿が天皇になってよいものですか」

その様に「中大兄皇子」は答えた。それを聞いた「皇極天皇」は奥に退き、「入鹿」は止めを刺された。なんか「入鹿」が哀れに思えてきた。

其の後、遺体は「蘇我蝦夷」の屋敷へ送られ、「中大兄皇子」は飛鳥寺に入り、防護を固めた後に彼等に帰順を求めた。「蘇我蝦夷」方

では部隊を集結させたものの、降伏の勧告に従う者が相次ぎ、翌日「蘇我蝦夷」は自邸に炎を放ち自刃した。

勿論、此れが後世に創られた勝者の歴史に過ぎない事は忘れてはならないが。

また、此の時に大量の史的資料が失われたと見られている。

そして此処に蘇我氏は滅亡した。干支を用いて此のクーデターは乙巳の変と呼ばれている。

## ○本項の時代の天皇一覽○

第三十四代 舒明天皇

第三十五代 皇極天皇

## IX. 大化の改新

645年7月12日、「皇極天皇」は弟の「かるのみこ輕皇子」に讓位した。史上初の生前退位である。そして「輕皇子」が第36代「こうとく孝徳天皇」として即位した。

「中大兄皇子」は皇位継承筆頭候補として、実権を持った。尚皇太子制はやはりまだ確立されていないので皇太子という呼称は正しくない。又、彼は少し後の話だが、対立候補の「古人大兄皇子」を処刑

し、さらには「孝徳天皇」の息子の「有馬皇子」にも謀反の疑いをかけ、結果的に「有馬皇子」も処刑した。

大臣は左大臣・右大臣に分けられ、右大臣には例の「蘇我倉山石川麻呂」が就いた。左右大臣は二人で政策の執行にあたった。

「中臣鎌足」は内臣となつて、「中大兄皇子」の政治を支えた。さらには政策担当として留学僧が国博士の職に就いた。内臣と国博士とが協力して政權立案にあたった。

こうして官僚制度が少しずつ整えられていく。

7月15日、初の元号「大化」が制定される。さらに此の日、「孝徳天皇」が神々に誓つた中に「帝道は唯一である」という文があつた。ここに天皇家が明確な定義を受けたのだ。もしかしたらこの前の時代には天皇家が血縁外から養子を受ける事もあつたかもしれない。尚、此処まで日付は西暦に直して使ってきたが、此処からは旧暦の日付をそのまま用いたい。判りにくいのは申し訳ないが、年数表記と一致させるためである。因みに此の西暦645年7月15日は、和暦大化元年6月19日である。又、大陸関連の記述等国外の事については全て西暦のみで表記する。

2箇月程の後、新政権はまず直轄地及び東国で戸口・人口及び田園面積の調査にあたった。

さらに男女の制で父子相統の原則を定めた。

12月、難波宮に遷都。難波は海外への玄関口にして、外交や交易の設備も整った地であった。

大化2年1月1日、「孝徳天皇」が改新の詔を發布なされた。内容は公地公民、都域の制定、班田收授法、租・調・庸から成る税制等である。概ね義務教育の通りであるから特に細かく説明しない。

3月には、所謂薄葬令で古墳の建造を取り締まり、殉死も禁じた。

8月に入ると、氏姓制度を打破するために部が廃止される。部とは、各豪族の世襲グループといった本来は豪族が天皇家に奉仕するための制度である。

翌大化3年には冠位十二階を再編、冠位十三階を定めている。服の色も冠に合わせて変えられたようで、最上位は引き続き紫である。更に大化5年に一部階級が上下に分けられ、再設定された。冠位十九階だ。

白雉4年(653年)、「中大兄皇子」が大和へ都を戻すことを進言するも、「孝徳天皇」はこれを拒否した。「中大兄皇子」は多くの重臣などを引き連れ飛鳥へ遷った。そして翌年、「孝徳天皇」が難波の地で崩御した。

そして何故か元「皇極天皇」が第三十七代「さいめい齊明天皇」として重祚した。重祚とは天皇の経験者が退位の後に再度即位する事をいう。

「中大兄皇子」が即位しなかった原因は不明であるが勿論政治は引き続き彼が担った。

大化3(647)年、新羅の「金春秋」が来日する。特に大きな成果を残したわけでも無く翌年彼は帰国し、更に唐へ渡った(既に隋は滅び唐が建っていた)。其処で唐の強大さを目にした彼は帰国後に唐の服制を公式に採用し、更には唐の年号を用いた。つまり唐の属国となったのだ。

(以降7世紀の間は元号が存在しない時期が続く為、暫く年号のみの西暦表記が続く。但し日付表記は記紀等の通りに和暦であることに注意。)

そして、654年に彼は百済の「武烈王」として即位する。

更に翌年、高句麗・百済連合軍が新羅への侵攻を開始した。唐も「武烈王」の援助要請に応じて三度にわたって高句麗への派兵をするも、どちらも失敗する。659年、「武烈王」は唐に先に百済の撃退を提案した。唐もこれに賛同し、翌660年3月、十三万人の唐軍が海を渡って百済へ侵攻を開始。白村(錦)江を遡った唐軍は、新羅軍と合流して百済の宮都泗沘城しひを包囲。百済の「義慈王」ぎじは逃走する。此の時兵等を見捨てたというから名前の漢字間違っていないのかなあ、とは言わず。しかし、彼も5日後には捕縛され、皇太子達と共に唐の都の洛陽で処刑される。日本からの遣唐使もこれを見せつけられたと

か。

さて、しかし都が落ちて唐が高句麗を主敵に改めると、各地の百濟軍残党はゲリラとして生きる道を選び、まず初めに倭へ使いを出した。すなわち倭に人質としている百濟の皇子「余豊璋」<sup>よほうしょう</sup>の返還を求めた。「中大兄皇子」は百濟との仏教伝来の頃、どころかそれ以前からの古い付き合いを考慮し、唐の予先を自分たちに向けられるリスクも考えられつつも返還に応じた。

そして、「齊明天皇」・「中大兄皇子」・「大海人皇子」<sup>おほあま</sup>（中大兄皇子の弟）は難波宮へ入り、翌661年1月に西国へ出発。中国四国の豪族に呼びかけ、兵を動員しつつ九州へ向かい、筑紫朝倉宮を建設した。

8月、「阿倍比羅夫」<sup>あべのひらふ</sup>率いる五千人の倭軍が「余豊璋」を百濟へ護

送。662年5月、「余豊璋」は百濟軍残党の將軍「鬼室福信」<sup>きしつふくしん</sup>と合流して、百濟王に即位する。ネオ百濟（勝手な造語）は各地で激戦を繰り広げるも、「余豊璋」と「鬼室福信」とが対立し、663年6月「鬼室福信」が殺される。

此の頃からネオ百濟も衰え始め、白村江の河口付近まで追い詰められる。朝鮮戦争なら韓国軍が釜山まで追い詰められたところで米軍が現れてソウルを奪還するのだが、8月中頃、ネオ百濟最後の砦の周留城（位置不明）も包囲された。そして「余豊璋」は倭軍と合流す

る。米軍に代わるホワイトナイトは倭軍、の様に思われたが、8月27・28日に倭軍と唐軍が衝突するも倭軍は惨敗してしまった。9月7日に周留城も落城し、此処に百濟は完全に滅亡したのだ。「余豊璋」は命からがら高句麗へ逃亡。「阿倍比羅夫」等倭軍残党は一部の亡命したい、と希望した百濟軍残党將兵と共に帰国する。

尚、朝鮮を巡って日中が対立する構図は現在でも同じである。地政学的に考えて此れは必然的ともいえる。

一方筑紫でも「齊明天皇」が崩御し、「中大兄皇子」が称制した。称制とは天皇不在の状態で大権を振るう事を呼ぶ。摂政とは似ているが天皇の在・不在の点にて明らかに異なる。

そして「中大兄皇子」は664年2月、氏を大氏・小氏・伴造<sup>とものみやつこ</sup>に分

け、其の氏上に武器を与えた。更に氏毎に調を氏に収める民部<sup>かきべ</sup>と朝

廷の課税を免れる、氏の直属民たる家部<sup>けふか</sup>を定めた。官僚制が未発達な為に未だ氏姓制度が根強く残っていたのだ。例えば兵の動員も豪族、つまりは氏単位で行われていた。其のうえで、冠位十九階を更に細分化し、冠位二十六階として定め直された。

そして、唐・新羅の来たるべき来襲に備え、対馬に金田城、大宰府の防衛の為に水城<sup>みづき</sup>・大野城<sup>おのき</sup>・椽城<sup>き</sup>、更には生駒山（奈良県生駒市／大



阪府東大阪市)の高安城等朝鮮式の山城を各地に建設していった。勿論この時代の城には天守閣も石垣もない。更に筑紫・対馬・壱岐に

さきもり しがひ  
防人と烽を設置。防人とは海兵隊、烽とは狼煙を伝える設備である。

667年には都を大津宮へ遷す。大津とは勿論今の滋賀県大津市に当たるが、内陸部にあるという点で防御には向いている。又、東国・北陸に繋がり、いざという時に東国の兵を速やかに動員出来るのだ。宇治(淀)川で大阪湾に直接アクセス出来るなどこれまた交通の要衝でもあった。

翌668年1月、「中大兄皇子」は第三十八代「天智天皇」てんじとして即位。

長い称制が幕を閉じる。

「中臣鎌足」等によつて近江令が制定されたともいわれるが、これは法典が確立されたというよりは、律令制の先駆けたる同時期の法律群をそう総称したと考えられる。同時期の朝鮮半島でもそんな感じなので。

一方此の頃、朝鮮半島では、高句麗が唐の猛攻を受けていた。高句麗の援軍要請にも倭には応じる程の力さえも残つておらず首都平壤は陥落。700年もの歴史を誇る高句麗も此処に滅亡したのだ。

さらに新羅としても朝鮮半島に唐軍が駐屯しているのはハイリスクだから、唐軍の追い出しにかかつていた。671年には百済の旧都泗沘城を奪回した。

さて話を日本に戻して、670年、「天智天皇」は初の戸籍である庚午年籍を作成された。これは画期的な事で、新天地にて西欧諸国が戸口調査を行うと必ず反発が起きたというように、当時名前は呪詛に使われる可能性から無関係の人間には隠そうとする文化があり、全国規模の戸籍が作成されたというのは素晴らしい事なのだ。

そして671年「天智天皇」が病に倒れた。病床にて、弟の「大海人

皇子」に後を託したというが、「天智天皇」が息子の「大友皇子」おおともを

皇位に就ける事を望んでいると知っていた「大海人皇子」はすぐに出家し吉野に隠遁した。更にその年の11月、白村江の戦いでの捕虜を返還する使者がやってきて、朝鮮半島での対新羅戦線回復のための援軍を求めた。親兄弟が突然政治から離れた為、「大友皇子」は父に對して、重臣に結束を誓わせる程度の事しか行われなかった。そして12月3日「天智天皇」は遂に崩御をした。

尚、翌年5月、「大友皇子」は唐の使者に「天智天皇」崩御の事実を伝え、軍需物資の支援のみ行つて帰国させた。

## ○本項の時代の天皇一覽○

第三十六代 孝徳天皇

第三十七代 齊明天皇(皇極重祚)

第三十八代 天智天皇

## X. 壬申の乱

672年5月、「大海人皇子」の舍人が報告した。即ち、近江の「大友皇子」が「天智天皇」の陵墓を造ると称して人夫を集め、武器を持たせているという。此れを吉野攻撃の準備と捉えられた「大海人皇子」は6月22日、舍人を美濃に派遣。直属民に不破関の制圧・封鎖を命じた。尚、美濃は「大海人皇子」の勢力圏であった。更に6月23日、各地の駅馬の使用証である駅鈴を飛鳥の役所に申請、しかし拒否される。勿論此の事は近江に報告されるであろうから、急遽「大海人皇子」は吉野脱出を決意した。妃の「鷗野皇女」(天智天皇皇女)や息子の「草壁皇子」(彼は鷗野皇女の息子である)・「忍壁皇子」(刑部皇子)、近臣と侍女を連れられて美濃へ向かった。尚、此の「忍壁皇子」は後の大宝律令制定に深く関与する。

その日の日が暮れた頃、伊賀との国境の大野に達するも「大友皇子」の母は伊賀の豪族の出身であったため、夜通しで進んだ。横河(現名張川)を渡る時には自ら舳(古い用の星座盤)を手に取り、

翌朝には積殖(現三重県柘植町)で長男の「高市皇子」と合流する。彼は大津宮から脱出したのだ。

その日の日暮れには坂下(現三重県鈴鹿市付近)に、さらに迹太川で夜明けを迎える。現在では此の川は此れに因んで朝明川と呼ばれ

ている。其処で三男の「大津皇子」と合流する。

そして間もなく不破関の封鎖成功の報せを受け、「高市皇子」を現地に派遣。此の日の夜に桑名に入り、休憩をとるまで実に2日間ひたすら歩き続けたのだ。グーグルマップの経路検索によると現在は27時間で歩ける。但し、道はアスファルト舗装され、川にも沢山橋が架かっている。とすると2日程掛かるというのも妥当だろう。一応追われた身でもあるし、高低差もかなり大きい。尚、車なら2時間程だそう。昔の人たち、やっぱり可哀そう。

さて、「大海人皇子」は東国の兵の動員に成功したのに対し、「大友皇子」は西国の兵の動員に困っていた。中国地方を管轄する吉備国の大宰や筑紫の大宰は兵の動員に難色を示した。結果吉備国の大宰は殺害されたが、筑紫の大宰は唐対策を理由に使者を突っぱねている。二人とも大海人派閥に既に取り込まれていたのだ。

まあ戦いを細かく書くのも嫌になったので(だって勝敗は明らか)、簡潔に言うと大海人サイドは東国の大軍で以て近江に攻め込んだ。大友サイドは壊滅し、7月23日に「大友皇子」は自害する。尚明治時代に彼は第三十九代「弘文天皇」として認められた。

此の戦いが行われた672年の干支は壬申。故に此の戦いは壬申の

乱と呼ばれているのだ。

## ○本項の時代の天皇一覽○

第三十九代 弘文天皇

## XI. 律令国家の形成

壬申の乱で勝利した「大海人皇子」は673年2月飛鳥岡本宮で即位する。第四十代「天武天皇」である。尚、飛鳥岡本宮は後に近くに増

設された宮殿とまとめて、朱鳥元(685)年から飛鳥浄御原宮と呼ばれるようになる。此れ以降は其の名称を採用したい。尚、「舒明天皇」の飛鳥岡本宮、「斉明天皇」の飛鳥板蓋宮と同じ位置にあったとされる。

面白い事に彼は同年閏6月に耽羅(現済州島)からやってきた「即位祝いの使い」と「天智吊いの使い」の内、即位祝いの使いのみを迎え入れた。壬申の乱は蘇我氏滅亡を凌ぐ革命であったともいえるのではないだろうか、と勝手に僕は思う。しかも、彼は赤色の軍旗を採用している。晩年には朱鳥の元号を制定されるなど漢を築いた劉邦が項羽との戦いに赤色の軍旗を用いたことを模倣なされているのである。面白いでしょう、ね、ね、ねー。

なんかキモい。

因みに皇后には例の「鸕野皇女」が選ばれた。

さて、壬申の乱で保守的な畿内の豪族たちも力を失い、大化の改新以降進められてきた官僚制度充実の為の改革がいよいよ本格的かつ速やかに進み始める。

彼は大臣等を一切置かず、一応要職に天皇家を置かれた為に此れは皇親政治と呼ばれる。が、彼は他の天皇家の意見にさえ耳を傾けなかった。彼は蘇我氏以上の独裁者だったのだ。毛沢東と一度比べてみたい。

畿外の豪族出身者でも実力によって官人に登用する制度を採用したり、後の世の官位相当の先駆けたる身分制度を築き上げたりして、681年には律令の制定を命じた。

更に、同年に角髪を髻に変える様に命じた。此れは髻の方がより冠にフィットした髪型と考えたからだという。更に682年には位階を冠で表す制度を改め、朝服の色で表す様にしたという。朝服とは官人が登庁の時に用いた衣服の事である。

684年には八色の姓が制定される。上から真人・朝臣・宿禰・忌寸・

道師・臣・連・稻置である。といっても、既に存在した臣・連等から

一部豪族を選んで姓を与えていただけ。壬申の乱の論功行賞も兼ねていたという。

尚武士の發達と共に日本中に朝臣が溢れ返る事になり、有名無実化していく。織田信長も豊臣秀吉も徳川家康もみんな朝臣。但し、信長・家康が自称世襲であるのに対して、秀吉は農民出身なので豊臣秀吉として改めて下賜されたのだ。

更に翌685年、冠位四十八階が定められる。最早とても全部書いていられない(十超えたら無視する積もり、十二でも書いていない)。尚、諸天皇家には更に上位に十二の階級が定められる。天皇家は朱花、豪族のトップは紫だった。

彼は神道を重視し、各地の祭祀文化を無理やり「天照大御神」に結び付けた。こうして国家宗教たる神道が形成されていく礎を彼が築いたのだ。天皇家の女性が初めて斎王として伊勢神宮に送られたのは「天武天皇」治世の事だ。尚、斎王とは未婚の内親王ないし女王から選ばれ、天皇の代替わり毎に「天照大御神」の御杖代として伊勢神宮で神々に祈りを捧げる役職だった。戦乱の度に断絶されつつ、南北朝時代迄続いた。一説には「崇神天皇」治世から存在したとも、「用明天皇」治世迄存在したともいわれ、それを「天武天皇」が再開しただけとも考えられる。が、僕はあまり信じていない。

そういえば独裁政治には肅清が付き物である。ソ連の「スターリン」がその最悪の例。「金正恩」の肅清なんてかわいいものだ、といったら怒られるが。先日NHKでモンゴル帝国(あの蒙古襲来のモ

ンゴルである)はクリミア半島での戦いで、ペストで死んだ味方兵を敵の城に投げ込んでいたという内容の放送を視た。それが14世紀のペスト大流行のきっかけになったというから、肅清とは違うけれど生物兵器は侮ってはいけない。スペイン風邪が第一次世界大戦に大きな影響を与えたともいう。そして日本人は日中戦争で生物兵器を大量に使用している。人道に対する罪に違いないが、日本人の多くはその事実を全く知らない。

話が大きく逸れたが、「天武天皇」も軽く肅清に手を染めている。天皇家が臣下かを問わずに多くの人間が遠島へ流罪の処分を受けた。勿論 they are not 冒険少年。植物学や天文学等についても未発達なので、某あばれる彼とは違って、帰って来られるわけもない。世界のどこの海にでもペットボトルが落ちている事はまずない。まあ679年にたつぷり恩赦で罪人が赦されたという。あれ、意外と優しい独裁者だぞーん。

そろそろ「天武天皇」の出番は終わる。

だがその前に、「天武天皇」の時代から天皇称号が使われていたとするのが概ね現在の通説である。木簡は物を語るのだ。コンビニのレシートを埋めて置くと、1300年後には歴史的価値を帯びるのかもわからない。そういえばTBSで、サッカー場1面程の面積あたり2700円で月の土地が買えるという放送を視た。投資の価値は絶大、しかしそれが法的な効力を持つ物なのか?調べてみようと思う。因みに日本書紀で単に天皇と言うと「天武天皇」の事を指す。

又、日本初の国産貨幣富本銭は此の時期に発行された。後でもう一度触れる。尚、ネットで出回っていたものは偽物が殆どだった。本物ならば数十万の値段はつくかと思う。僕に売ってくれたらば、5千円で買い取ります。

686年、「天武天皇」が崩御する。勿論此の時代には終末期の体温や血圧を伝えるラジオ放送も無い。

例の「鸕野皇后」が息子の「草壁皇子」を天皇に据えようとされた。そこで対立候補の「大津皇子」に謀反の疑いをかけ、彼を自害に追い込む。ただ、彼の母と「鸕野皇后」は同母姉妹であるのだが。しかし、いざ即位という段階で「草壁皇子」が急死なさった。「草壁皇子」と妃の「阿閉<sup>あへ</sup>皇女」（天智天皇皇女）の間には息子の「輕<sup>かろ</sup>皇子」がいたが、当時まだ幼かった。

そして、皇位継承に詰まった時に女性が即位した「推古天皇」・「皇極天皇」の例に従って、690年に「鸕野皇后」が第四十一代「持統<sup>じとう</sup>天皇」として即位する。

689年には「天武天皇」時代から編纂されていた律令の令部分が完成、施行される。飛鳥浄御原令である。律とは刑罰、令とは行政について定めるものである。

690年には浄御原令に基づいた戸籍が定められる。庚寅年籍である。此れ以降、六年以降戸籍が作られる。しかし、当時の戸籍は税制の為に作られたのであって、兵役と諸税の徴収に用いられた。一戸につ

き男性四人を含むように戸が編成された。家庭単位としての家とは全くの別物だ。しかも一里につき五十戸、つまり一里毎に一部隊が編成されたのだ。そして、戸籍に基づいて班田収授が行われた。勿論此れは中国の均田制をモデルにしているが、中国では支給面積を實際より盛って世間で囁かれる理想高として発表していたのに対し、日本では理想高で発表し其の儘支給する方法が採られた。良い国に生まれた。人口は少ないが、面積も狭いの。尚、現在では国勢調査が5年おきに行われる。令和2年にも実施された。

又、律令制の整備と同時進行で「天武天皇」治世から行われていた藤原京の造営が終わり、694年に遷都。国内初の条坊制の敷かれた都で、飛鳥地方の西北部に築かれた。僕もてつきり長安なり洛陽なりをモデルに築かれているものだと思っていたが、どうも京の中心に宮を置くという中国における理想的な宮都像に基づいたものでないか、との事である。先に書いたように思うが、中国の影響圏内にある国々の中で、例えば当時の朝鮮には律令は存在しなかったが、日本にはそれが既に出来ていた。他に、貨幣についても藤原京の東南部、飛鳥池遺跡の工房跡地から富本銭と呼ばれる国産の銅銭が出土しているが、他の国々で自前の貨幣製造がおこなわれるのは10世紀以降の事である。それにそれらの国では年号も中国の物を使っていたが、日本では独自に元号が定められた。やはり此れには日本が中国の冊封体制の外側にいた事が大きく影響していると考えられよう。結局日清戦争で勢力が逆転した。

697年、「持統天皇」は15歳になった「軽皇子」に皇位を譲る。第四十二代「文武天皇<sup>もんむ</sup>」である。勿論、「持統天皇」は「太政天皇」として御後見の任に就いた。「持統上皇」である。尚、此れが史上初の上皇であるが、視点次第では孫想いのおばあちゃんである。

即位後、上皇の主導で新しい律令の編纂作業が進められる。主に、天武天皇皇子の「刑部親王」(忍壁親王)や、「中臣鎌足」の息子の「藤原不比等」等によってつくられた。700年3月に令が、大宝元(701)年8月に律が完成する。完全なる律令としては日本初だが、此れが大宝律令である。

此の701年とは忙しい年で、

1月1日、天皇は藤原京の大極殿にて官人達の朝賀を受けた。大極殿の前には旗鉾・旗が立てられ、更には新羅の使いも此れに参列した。天皇の権威を国内外に示したという事になる。

1月23日、粟田真人を主席に「天智天皇」治世以来となる凡そ30年ぶりの遣唐使が派遣される。此の遣唐使が初めて日本の国号を用いたと言われる。勿論、当時は国旗も君が代も憲法もない。ただ、君が代は間違いなく皇室を歌ったものだ。

3月21日、対馬から朝廷に金が献上された事をきっかけに元号「大宝」が制定される。此の大宝から令和まで元号が途切れた事は無い。よってこの先はずっと和暦で日付を表記する。

8月には先述の通りに大宝律令が完成した。翌年には正式に施行された。

その内容であるが、まず官人は正一位から少初位下までの三十階級に分けられた。全て官人は其の冠位に見合った役職に就く事が一般となった。勿論か旧役人の昇進は難しく、特に従五位下より高位の貴族は殿上人と呼ばれ、清涼殿への昇殿を許された。それより下位の官人は地下と呼ばれた。

律によって定められた刑罰はまとめて五刑八虐と呼ばれる。五刑

とは答(細い棒で十から五十回尻を叩く)・杖(太い棒で六十から百

回尻を叩く)・徒(一から三年間の懲役)・流(遠隔地で拘留)・死(絞

首又は斬首)の五つの罰、八虐とは謀反(天皇暗殺・国家転覆)・

謀大逆(御陵・内裏の破壊)・謀叛(国家への背反行為)・惡逆(祖父母・

父母への暴力・親戚の殺害)・不道(大量殺人・夫とその家族への暴力)・大不敬(天皇不敬)・不孝(親不孝)・不義(礼儀に反する行為)の八つの重大犯罪である。

大宝律令の他に特に「文武天皇」治世に目立った出来事は無いと思う。しかし、大宝律令の編纂に「藤原不比等」等が関わっていた事を含め、此の時期から藤原氏の台頭が目立つようになる。藤原氏とは「中臣鎌足」に「天智天皇」が与えた姓であり、「不比等」は「鎌足」の子供である。

○本項の時代の天皇一覽○

第四十代 天武天皇

第四十一代 持統天皇

第四十二代 文武天皇

## XII. 奈良遷都

慶雲4(707)年6月、「文武天皇」が崩御する。彼の息子の「首皇<sup>おひと</sup>

子」も未だ幼く、又も女帝が誕生する事となった。第四十三代「元明<sup>げんめい</sup>天皇」、元「阿閑皇女」である。先に一度名前が登場しているが、彼女は「天智天皇」の娘にして「草壁皇子」の後、「文武天皇」の母である。又、彼女は初の皇后経験のない女性天皇である。

翌慶雲5(708)年、正月の祝いもせず、都に暗い空気と疫病が蔓延していたところに秩父から銅が献上される。此れを機に和銅に改元、貧民に支援策が、罪人に恩赦が下され、気分の一新が図られた。更に2月15日奈良盆地北部に新たな都を造営するという詔が發布される。

平城京である。平城京は唐の都長安をモデルに設計されるが、これにはやはり30年振りの遣唐使が「文武天皇」治世終盤に帰国した

事が深く関係したのではないだろうか。彼らが新京建設の為の廟議に参加し、長安での驚かされた事を、唐の強大さを報告したのではなからうか。そして唐の威容に刺激された朝廷の人々は、やはり遷都を進めようと考えたのではないだろうか。

此の時代でもこれから住む土地は気になるらしく「元明天皇」は9月20日に平城京建設予定地を西の菅原から、同月末には東の春日からそれぞれ都を見物している。

「元明天皇」は予定地が気になったよう藤原京に戻って後、建設チームを正式に任命。此処に建設事業が正式に発足し、地鎮祭等が行われる。

「元明天皇」はやはり建設中の都が気になる、和銅2(709)年の秋と冬にそれぞれ建設中の平城京へと足を運んでいる。

そして和銅3(710)年3月10日、藤原京から平城京への遷都が行われる。計画公表から利用の開始までが凡そ25箇月。尚、計画都市ブラジリア(1960完成)は発表から利用まで51箇月。

遷都の際に藤原京に左大臣の「石上麻呂<sup>いそのかみ</sup>」を留守官として留め置いた。有事に備えて旧都に人を残すのは昔からの風習らしい。これもまた右大臣「藤原不比等」への権力集中に一役買ったか。

さて、平城京の構造であるが、条坊制によって碁盤の目状に区画され、中央を朱雀大路が走り、内裏から見て朱雀大路の右側が右京、左側が左京と呼ばれた。内裏が北辺に配置されているのは中国の皇

帝は不動の北極星を背負い、南を向いて政治を行う、という天子南面の考えに沿ったものである。

ローマ帝国の例がわかりやすいが、政治体制の整備は交通の大きな発展をもたらす。日本でも律令国家の出現に合わせて都から各地の国府・郡家を結ぶ直線道路が各地に出現した。どうやら本当に道は直線だった様だ。此れは条里制に影響された点もあるだろう。

尚、条里制とは土地の把握の為に行われた区画整理である。

和銅年代にはもう一つ有名な物がある。和同開珎だ。例の秩父産出の銅を用いて製造されたが、和同開珎もまた唐の開元通宝をモデルにしている。文字数も同じである。

和銅7(714)年、「首皇子」が元服し、皇太子に立てられる。しかし、和銅8(715)年9月「元明天皇」は自らの高齢を理由にして皇位を娘

の「氷高内親王」に譲った。第四十四代「元正天皇」である。「首皇

子」に譲らなかった理由は年が幼少だから、とされたが彼は元服を済ませた15歳。「文武天皇」も15歳で即位しているから年齢上の理由ではないだろう。健康上の理由か、或いは朝廷内部に即位に反発する勢力があったか。

兎に角、即位した彼女は未婚であり、史上初の未婚の女帝である。そして彼女は史上五人目の女帝である。慈悲深く落ち着いており、美しかったという。

霊亀2(716)年、「藤原不比等」の娘「光明子」が皇太子「首皇子」

の妃に立てられる。尚、「文武天皇」の皇后も「不比等」の娘であったから「不比等」は「首皇子」の外祖父であった。これは蘇我氏のとった勢力拡大方法と同じである。

更に同じころ相次いで太政官の議政官が病死。

議政官が「藤原不比等」と他三人という状況に陥った。其処で、勿論後任が選ばれるのだが、彼は策略を巡らせて自らの四人の息子を其の地位に就けた。律令制度では氏毎に官職を定めるのではなく、父子間の親子関係が重要だった。つまり複数の子だろうと有能ならば採用されていたのだ。此れにより、四人全員が三位以上まで昇進。各々家を持つだけの力を掌握し、藤原四家(南家・北家・式家・京家)の祖となった。此の北家が後に大発展を遂げるが、少なくとも当時既に「藤原不比等」に絶大な権力が集中していた事は言うまでもない。

尚、太政官とは神祇官に並ぶ二大官職で、行政の全般を取り仕切った。

### ○本項の時代の天皇一覽○

第四十三代 元明天皇  
第四十四代 元正天皇

## XIII・長屋王・聖武天皇

藤原京や富本銭が中国のものをモデルにしつつ独自の路線を模索



していたのに対して、平城京や和同開珎は積極的に中国のやり方を模倣・踏襲していった。大宝律令は前者に当てはまるものだが、此の頃には中国に於いて代替わり毎に律令が更新される慣習に則り、新しい律令の製作作業が「藤原不比等」等の手で進んでいた。此れは「首皇子」即位の準備であろう。

併し、養老4(720)年8月3日、あらゆる祈祷の甲斐無く「藤原不比等」が病没する。「元正天皇」は政務を後にして冥福を祈った。

死後八十日にあたる日、筑紫で隼人と戦っていた中納言

おおもとのみかひ  
「大伴旅人」と「高市皇子」の息子である大納言「長屋王」とが「藤

原不比等」の屋敷に派遣され、正一位太政大臣を贈る事を伝えた。贈官ながら大宝律令後初の太政大臣である。

尚、「元明上皇」も同じ頃に極めて丁寧な遺言を遺して崩御した。といつても内容は葬儀に関連した事である。

養老5(721)年、「長屋王」が従二位右大臣に昇進。朝廷の首座に進んだ。

併し、藤原四兄弟が「元正天皇」の意思決定に深く関わり、更には太政官の参議間の公卿会議にも出席していた。

そして養老7(723)年1月、「長屋王」や「大友旅人」と肩を並べる実力さえ持っていた「多治比三宅麻呂」と「穗積老」とが謀反の罪で

讒言に遭い、死刑を宣告された。勿論此れも四兄弟によるものだ。彼等は「首皇子」が助命嘆願なされた為に流罪に済まされたが、しかし

朝廷内での四兄弟への不満は募っていき、四兄弟と「長屋王」との互いに牽制し合う政治体制は継続された。

さて其の濁った政治体制についてだが、同時期に班田收授法が三世一身の法へグレードアップした。人口増加により口分田の為の土地が不足していることが其の原因である。口分田が6歳以上の全男女に支給される制度に加えて自ら開墾した土地の三代もの間の使用权を手に入れられるようになった。しかしこれは新たな開墾地を逐一報告する必要がある、いずれ其れが国に収用され、赤の他人に口分田として班給される。此れを当時の人々がどの様に考えていたかは解らないものの、此れだけでは朝廷の思うようには耕地開発が進まなかった。

神亀元(724)年2月4日、「元正天皇」は「首皇子」に譲位。第四十

五代「聖武天皇」である。

「聖武天皇」の即位後間も無くとある前代未聞の大事件が起こる。

よりによって即位当日、「天皇の母の『宮子夫人』を大夫人と尊称するように」という勅令が発表される。勅令は内臣「藤原房前」(藤原不比等次男)等側近衆によって中務省でつくられ、一切太政官とは別ルートからのボトムアップの形がとられている。

三月下旬、蚊帳の外の「長屋王」は此の勅令に疑問を持ち、「聖武天皇」に問い合わせる。「大夫人と尊称するようにとの仰せでありま

すが、律令を調べるに称号は皇太夫とされており。勅令を奉じると律令に反して罰されますが、律令に従っても勅令に逆らった罪で律令によって罰を受けます。さて、どちらに従うべきでしょうか」という質問だったが、「聖武天皇」とその側近衆も此れには反論できず、「勅令を回収し、文字表記を皇太夫人、読み方はオオミオヤとするように」と改めて勅令を発表した。空前絶後の勅令回収である。でも昭和天皇が開戦の詔勅を撤回したら笑っても済まされない。そうなたら抵抗もせずに米軍に反撃されるのか。まあ逃げはするか。逃げて済まされれば民間人に死者なんて出る筈無いが。

尚、前記詔勅・質問のどちらにも要約である。一目瞭然か。そして、「長屋王」と四兄弟の対立は表面化した。

神亀4(727)年閏9月末、「光明子」が「聖武天皇」の皇子を出産する。「基皇子」である。さらに同年同月同日に生まれた全ての子供に祝いが配られた。まあ劉備にかかれれば桃園でその差も埋めてもらえるらしいけど。でもあれは兄弟か。更に、「基皇子」は皇太子に立てられた。

劉備は本当にどうでもよくて、翌神亀5(728)年9月、まだ満1歳を迎えていない「基皇子」が崩御する。

神亀6(729)年、2月10日、「基皇子」の死は「長屋王」の呪いによるものだという馬鹿げた密告が入る。しかし、当時は此れで人が死ぬと本当に信じられていたため、犯罪が成立するのだ。其の日の内

に勅令によって鈴鹿関(伊勢)・不破関(美濃)・愛発関(越前)の検問が強化され、「長屋王」邸は包囲される。

翌11日、知太政官事「舎人親王」・大納言参議「多治比池守」・中納言参議「藤原武智麻呂」(藤原不比等長男)等が邸に入り、罪を詰問された。

12日、「長屋王」と其の息子達は自経した。自経とは、自ら経で死ぬ事である。妃の「吉備内親王」(草壁皇子の姫君)も後を追われた。

当時、「長屋王」と激しく対立していた皇族などおらず、明らかに此れは四兄弟の陰謀である。

尚、今の時代では却って名誉棄損で訴え返される可能性すらある。此れは従七位下の人と無位の人が讒言したのだが、普通はそんな地位の人間の密告は充てにされないと思うのだが。というか僕は讒言をするような弱い人間は嫌いだから、讒言者の名前は書かない。讒言をさせる強い人は嫌いではない、が。

以上が所謂長屋王の変である。

6月下旬に和泉川で見つかった甲羅に「天王貴平知百年」と刻まれた亀に因んで、8月に元号が神亀から天平に替わる。亀が見つかったから元号が亀でなくなる。面白いからつい書いてしまった。元号が天平に替わった5日後、「光明子」が立后される。非皇族出身者

の立后は異例で、生きていたら間違いなく反発する「長屋王」が死んだことがこのタイミングの原因だろう。もともと、「長屋王」は彼等によって抹殺されたのだが。

当時、平城京には不審な仏教集団がいた。「行基」という僧の一行である。まあ天皇に直接関係ないからさらっと彼の活動を書く、仏教を広めているような、慈善活動をしているような、ただの物乞いのような、みたいな感じだろう。簡単に言えば妖言をして人を惑わせ、都の東方に数千から一万人を集めていたという。尚、当時の平城京の人口は十万人程度。すごい数だ。

朝廷も当初は弾圧を考えたが、結局は行為を容認していく。平城宮に天安門がなかった事が幸いしたのかな、なんて。不謹慎な事を言ってみる。

天平7(735)年夏、新羅經由で天然痘が九州で流行しだす。此の頃唐と渤海(現在のロシア沿海州の高句麗の後継王朝)の紛争の影響で、新羅との外交関係が悪化していた。まあそんなこともどうでも良く、天平9(737)年3月には朝廷から全国に釈迦三尊像の製作と写経の命令がかかる。しかし、勿論効果も無く、藤原四兄弟も四人そろって

あっけなく天然痘にやられた。政権の中枢には「鈴鹿王」(長屋王の

弟)や「橘諸兄」、唐帰りの「吉備真備」や「玄昉」が入った。

天平12(740)年秋、唐帰りの成金の二人に立腹の「藤原広嗣」(藤原不比等三男の藤原宇合の息子)が九州で反乱を起こす。すぐに鎮圧されたが、此の時「聖武天皇」は軍を派遣して自らは真逆の伊勢へ出掛けた。前線将校の空いた口が塞がらないだろうなあ。しかも其の儘「聖武天皇」は山背国相良郡恭仁郷に新たな都の造営を命じた。恭仁京である。

翌天平13(741)年、恭仁京に遷った「聖武天皇」は、2月に国分寺の建立の詔を出し、更に七重塔を造り、写経をする事と、僧寺と尼寺を其々造る事を指示する。

未だ恭仁京の造営も不完全な天平14(742)年、今度は近江国甲賀郡に紫香樂宮を造り、屢々「聖武天皇」は其処へ行幸為された。翌天平15(743)年、国分寺の総本山たる東大寺に盧舎那仏(以降、大仏)の造立を命じる。

これ等の仏教関連政策は、仏教の力で天然痘などの影響で乱れた国を治めるという思想の下に行われ、特に大仏を造るに当たっては仏に結縁する為に皆が財産・労力を出し合って造寺・造仏・写経をするためのグループである知識結の結成を「聖武天皇」自ら呼び掛けた。例の「行基」も此の一人一人の信仰心に問いかける考えに心を打

たれ、以降大仏造りを主導していく。

同年、天然痘によって荒廃した田畑の再開発を目指し、そして未開地の開発の為に墾田永年私財法が発される。開墾田の所有を認めたことで、こちらもまた人々の開墾への意欲を飛躍的に上昇させた。しかも、開墾田の永久所有という事で、水田面積は著しく増加した。しかし、これは後に莊園へ進化。卑貴経済格差の拡大に一役買ってしまう。

天平16(744)年、「聖武天皇」は官人の反対を押し切られて難波宮へ遷都する。しかし、翌天平17(745)年1月には紫香樂宮を都にする等、正直理解し難い行動を繰り返す。官人も此れには呆れ、「聖武天皇」に平城京へ帰る事を提案、5月には平城京に戻った。

さて、大仏であるが、此の年から本格的に金属の鑄込みが開始。天平勝宝元(749)年にはそれも終わり、残すは金メッキだけとなった。しかし、国内では其の金が入手できず、皆が頭を抱えていた頃、陸奥から遂に金の算出を知らせる使いが舞い込む。大仏の金は輸入せずに済んだのだ。

4月1日、「聖武天皇」は東大寺に行幸し、大仏の南に座って金の発見に感謝する旨の宣命を行う。平城京の構造について書いた時に触れたが、より北側にいる者が絶対者とされた為、天皇が南側に座るとするのは服従を示すことだ。更に此の宣命の中で、「聖武天皇」は自身を三宝の奴と表現した。仏教が国家宗教へと進化する段階に

於いて、この瞬間を以って天皇とは神話に正統性を裏付けられた存在から、仏によって正統性を保つ存在へ変化したのである。

大抵権力者というのは其の権力の正統性を必要とし、例えば後の武士政権は天皇家に將軍に任じられた事を其の根拠に、内閣総理大臣は国会の信任を其の根拠にしていると言えるだろう。

間もなく「聖武天皇」は娘の「阿倍皇太子」に譲位する。第四十六

代「孝謙天皇」である。そして自らは出家して薬師寺に遷った。

天平勝宝4(753)年3月、陸奥から届いた大仏の鍍金作業が始まる。併し、「聖武天皇」は此の頃体調が芳しくなかった。よって4月9日、南インド出身で唐から来日していた「菩提僧正」によって大仏開眼供養が執り行われる。僧正の持つ筆から延びる紐は、「聖武上皇」・「光明皇太后」・「孝謙天皇」等が握り、其れに百官が続いた。

そういえば「長屋王」も仏教を信仰していた。和銅5(712)年と神亀5(728)年の二回に亘って大般若経(600巻程もある)の写経会を執り行っている。現代人には無理だろう。

○本項の時代の天皇一覽○

第四十五代 聖武天皇

第四十六代 孝謙天皇

## XV・平安京遷都

天平勝宝8(756)年、「聖武上皇」が崩御した其の後「藤原仲麻呂なかまろ」(恵美押勝えみのおしかつ)、「道鏡」等の時代が其々あった。

簡単に言うと「藤原仲麻呂」は自らの一族を皇統に近づけようとして、「道鏡」は自ら皇位に就こうとした。

そして、先に「藤原不比等」が編纂していたと書いた律令も正式に制定される。養老律令である。此れは明治維新で刑法が新しく定められるまで続いた、最後の律令でもある。

少し経って天応元(781)年、第五十代「桓武天皇」が即位される。しかし、「聖武天皇」等が「天武天皇」系の天皇であったのに対し、「桓武天皇」は「天智天皇」の血統の出身だった。此れを口実にした

「天武天皇」の三世孫にあたる「氷上川継ひかみのかわつぐ」の謀反計画が露見した事

で、「桓武天皇」も決心し、延暦3(784)年5月に山背国長岡への遷都を宣言。11月には遷都した。因みに此の反乱に合わせて、「天武天皇」血統一派は一掃されてしまった。因みに唯一復権したのは万葉集で

有名な「大伴家持やかもち」だけであった。此れは皇太子「早良親王さわら」(桓武天皇の同母弟)の力添えによる復権だったという。復権後も彼は皇太子の下で勤めている。

しかし、延暦4(785)年9月23日、造営事業を手掛けていた責任者「藤原種継たねつぐ」が現場の見回り中に暗殺された。捕らえられた犯人「大伴継人つぐひと」の証言によれば首謀者は皇太子「早良親王」であるという。

一説には「大伴家持」(既に薨去)との関係が鍵となったとか。「大伴継人」は直ぐに斬首されたが、「早良親王」は罪を否認し続け、最後は食を絶ち亡くなった。

其の後「早良親王」の祟りが噂されるようになり、不吉な都に留まれないという事で、延暦12(793)年に平安京造営が始まった。そして翌延暦13(794)年、鶯の鳴く、平安京へ遷都した。

此の都も、第二百二十二代「明治天皇めいじ」が江戸に行幸なされるまで使  
用され続けた。

其の後の「桓武天皇」の政治は非常に独裁的なものであった。しかし、そもそも中央にいた貴族とは「天武天皇」崇拝を嫌った者共で、自ら「桓武天皇」の政治スタイルに合わせていった。特にその中心に

居たのが「藤原宇合」を祖とする藤原式家である。彼等は「桓武天皇」の最側近として権力を築き、娘達を桓武ファミリーへ嫁がせた。

特に皇太子を取り巻く東宮に式家の権力が集中していた。尚、先述の「藤原種継」も式家出身者である。但し、後の摂関家は式家ではなく、「藤原房前」を祖に持った北家である。そして当時東宮次官に就

いていた「藤原真夏」がいたことで、彼の父こそ北家の重鎮「藤原

内麻呂」にして彼の妻は元々「桓武天皇」の采女（側室）出身で、後に

「桓武天皇」の下へ戻り、皇子（傍流）を出産するのだった。此の縁で、後に北家が重用されていく。

「桓武天皇」は平安京の造営や征夷大將軍「坂上田村麻呂」による蝦夷征討、そして様々な民衆向けの徳政で知られる。

しかし、延暦19（800）年には「早良親王」に「崇道天皇」の称号を追贈するなど、後継問題に苛まれ、三人の皇子に十年ずつ即位するように遺言を遺した、とも伝わる程だ。

## ○本項の時代の天皇一覽○

第四十七代 淳仁天皇

第四十八代 称徳天皇（孝謙重祚）

第四十九代 光仁天皇

第五十代 桓武天皇

## XV・摂関政治の時代

延暦25（806）年、「桓武天皇」は崩御する。

皇太子「小殿親王」が踐祚され、翌日即位。「平城天皇」である。

彼の勢力基盤は「藤原種継」の息子にして式家のトップたる「藤原仲成」と「藤原薬子」（既婚ながら平城天皇との間にスキヤンダルを展開）の兄弟だったが、「平城天皇」治世は天皇の余りに拙速なやり方による朝廷分裂の関係で乱れ、大同4（810）年に弟の「神野皇子」に譲位した。「嵯峨天皇」である。

弘仁元（810）年9月10日、「嵯峨天皇」は「坂上田村麻呂」等に命じて「藤原仲成」を逮捕した。翌日射殺され、更に「藤原薬子」を追わせた。彼女は「平城上皇」と共に逃げる所を包囲されて服毒自殺。「平城上皇」も出家し、彼の息子の「高丘親王」は皇太子の座から廃

された。これが薬子の変である。

新たに「嵯峨天皇」の弟の「大伴皇子」が皇太子に立てられた。

「嵯峨天皇」は弘仁2(811)年から律令の上位互換といえる弘仁格式を編纂させた。

10年程天皇位を満喫した「嵯峨天皇」は弘仁14年に譲位し、第五十三代「淳和天皇」が即位する。そして10年後に「淳和天皇」が退位する。後には「嵯峨上皇」皇子の「仁明天皇」が即位した。彼の

皇太子には「淳和天皇」の息子「恒貞親王」が就いた。

其の後、安定した日々が続いたが、此の間に勢力を伸ばしていたのが北家である。「藤原内麻呂」だった。既に右大臣だった彼が薬子の変を裏で操っていたとも言われる。しかも息子達の内兄の「藤原真夏」を「平城天皇」に、「嵯峨天皇」には「藤原冬嗣」を仕えさせた。更に「藤原冬嗣」は、「仁明天皇」が皇太子に立てられたときには娘を彼に嫁がせ、「嵯峨天皇」の娘を息子の「藤原良房」が貰い受けた。

さて、承和9(842)年に「嵯峨上皇」が、承和7(840)年に「淳和天皇」が其々崩御する。

すると、「恒貞親王」の側近の「橘逸勢」等が逮捕された。皇太子

を東国にお連れして謀反を起こそうとした罪である。「恒貞親王」も皇太子の座から廃した。新たに皇太子に立てられたのは「藤原良房」の妹と「仁明天皇」との間に生まれた「道康親王」であった。此れを承和の変と呼ぶ。

因みに「仁明天皇」は竹取物語の天子に比定されることがある。

其の後、嘉祥3(650)年に「仁明天皇」が崩御し、後を継いだ第五十五代「文徳天皇」(道康親王)も天安2(858)年に崩御した。

後を継がれた第五十六代「清和天皇」は未だ9歳と極めて若く、政

治は臣下初の生きる太政大臣「藤原良房」が代行した。次に問題となつたのが、天皇の後である。「藤原良房」に子供は娘が1人しか無く、彼女は既に「文徳天皇」に嫁いでいた。其処で彼は兄の子供を二人、

「基経」と「高子」を養子に迎えた。此の「藤原高子」と平城天皇の傍流の孫にあたる「在原業平」との恋路を描いたのが伊勢物語である。

とはいえ未だ「高子」は幼く、「清和天皇」元服の折に臥所を共にしたのは「良房」の弟「藤原良相」の娘「藤原多美子」だった。

間も無く貞観8(866)年に起こったのが応天門の変である。かねてより天皇側近として力を蓄えつつあった「伴善男」と例の「藤原良

相」等が失脚した。勿論真相は不明だが、「良房」にとつて「多美子」に妊娠されては困るのであった。そして、この事件の対処の為に「良房」は臣下初の摂政に任じられた。此の年の末に「高子」は入内。<sup>じゅだい</sup>貞観11(869)年に「貞明親王」<sup>さだめき</sup>が誕生する。暫くして、「藤原基経」が摂政の座を受け継いだ。

そして、貞観18(876)年に「清和天皇」が突然讓位。「貞明親王」は、第五十七代「陽成天皇」<sup>ようぜい</sup>として即位する。

さて、「高子」は「在原業平」を「陽成天皇」の藏人頭に就け、彼の姪が「清和天皇」との間に生んだ「貞数親王」<sup>さだかず</sup>(一説に、業平と姪との子)を皇太子に就けようとした。一方、「藤原基経」は娘の「温子」を入内させようとする。基経・「高子」との喧嘩が元で元慶7(883)年「陽成天皇」が乳兄弟を殺してしまった折に、遂に「仁明天皇」皇子が連れてこられ、天皇の座に就いた。第五十八代「光孝天皇」<sup>こうこう</sup>である。彼は「藤原基経」の従兄弟にあたり、彼は閑白に任ぜられた。

暫くして「基経」が亡くなると、「光孝天皇」皇子の第五十九代「宇多

天皇」、更に皇子の第六十代「醍醐天皇」<sup>だいご</sup>は自ら親政を行われた。「宇

多天皇」を「橘広相」<sup>ひろみ</sup>が、「醍醐天皇」を「菅原道真」<sup>すがわらのみちまね</sup>が補佐して、特に「醍醐天皇」の親政は延喜の治と呼ばれる。其の後「醍醐天皇」の皇子第六十一代「朱雀天皇」<sup>すざく</sup>の時代に「藤原忠平」<sup>ただひら</sup>が摂政に就任して以降、第六十二代「村上天皇」<sup>むらかみ</sup>による天曆の治と呼ばれる親政を除くと、院政が始まるまでは所謂摂関政治が続く。

その間に、承平・天慶の乱や前九年・後三年合戦で武士が台頭。又、延暦寺等による強訴もはじまる。

#### ○本項の時代の天皇一覽○

第五十一代	平城天皇
第五十二代	嵯峨天皇
第五十三代	淳和天皇
第五十四代	仁明天皇
第五十五代	文德天皇
第五十六代	清和天皇
第五十七代	陽成天皇
第五十八代	光孝天皇
第五十九代	宇多天皇
第六十代	醍醐天皇



第六十一代 朱雀天皇

第六十二代 村上天皇

第六十三代 冷泉天皇れいぜい

第六十四代 円融天皇えんゆう

第六十五代 花山天皇かさん

第六十六代 一条天皇いちじょう

第六十七代 三条天皇さんじょう

第六十八代 後一条天皇ごいちじょう

第六十九代 後朱雀天皇ごすざく

第七十代 後冷泉天皇ごれいぜい

第七十一代 後三条天皇ごさんじょう

## XVI・院政

応徳3(1086)年、第七十二代「白河天皇」が息子に譲位した。第七

十三代「堀河天皇」は未だ8歳、とはいえ「白河上皇」が院として実

権を握ってしまったのだ。勅令に代わる院宣いんせんを発し、政治を執り行ったのだ。勿論摂政・関白も同時に存在したが、彼等に「白河上皇」のやり方に異を唱えるだけの権力は無かった。何故ならば院は強い近臣の結束によって支えられていたのだ。更に上皇は「平正盛」を味方に取り込み、所謂北面の武士と共に身辺警護にあたさせた。武士の使い方が他の天皇と比べてもうまかったのだ。それまで武士の棟梁とも言われる地位にいた「源義家」は後三年の役を私戦と規定され、更に息子の「源義親」が反乱の罪で平氏に討たれた為に、源氏と平氏の地位は入れ替わってしまった。此れが源平対立の火種となったといえよう。

そして、「白河上皇」の院政は「堀河天皇」の崩御の後も、其の皇子の第七十四代「鳥羽天皇」、更に其の皇子の第七十五代「崇徳天皇」の治世に「白河上皇」が崩御するまで続いた。

更に其の「鳥羽上皇」も皇子の「崇徳天皇」、其の兄弟の「近衛天皇」、同じく兄弟の「後白河天皇」治世まで院政を敷いた。

其の流れに乗る形で院政を敷こうとした「崇徳上皇」、其れを嫌がった「後白河天皇」の間で対立が起こるのは必至で、両者は保元の乱で衝突した。其の後「後白河天皇」も院政を敷いたが、平治の乱で平氏が実権を握った為に「後白河上皇」の院政とは平氏との関係に左右されたものだった。最終的に「平清盛」は上皇を幽閉し院政が途絶えた。

特に彼の皇子の第八十代「高倉<sup>たかくら</sup>天皇」及び其の皇子の第八十一代

「安徳<sup>あんどく</sup>天皇」は特に平氏の傀儡と言える存在であった。「高倉天皇」

も「安徳天皇」治世に平氏に協力する形で院政を持つが、間もなく崩御した。

尚、「後鳥羽上皇」は其の後院政を再開。第九十二代「後鳥羽天皇」治世にて崩御するまで院政を続けた。

後は中世担当と義務教育に任せたい。

## ○本項の時代の天皇一覧○

第七十二代 白河天皇

第七十三代 堀河天皇

第七十四代 鳥羽天皇

第七十五代 崇徳天皇

第七十六代 近衛天皇

第七十七代 後白河天皇

第七十八代 二条<sup>にじよう</sup>天皇

第八十九代 六条<sup>ろくじよう</sup>天皇

第九十代 高倉天皇

第九十一代 安徳天皇

第九十二代 後鳥羽天皇

気紛れで古代を選んだが、思ったよりハードスケジュールとなった。残念。でも摂関政治の時代って政治の表舞台にいるのが天皇よりも藤原氏だから、まああんまり触れなくても許容でしょう？

※※※※※※※※※※※※※※※※

## 参考文献

青木和夫 「日本の歴史3 奈良の都」 中央公論社 1965年

上田正昭 「大和朝廷」 角川書店・角川新書 1995年

河合敦 「読めばすつきり！よくわかる天皇家の歴史」 角川マガ

ジズ・角川SSC新書 2012年

河内春人 「倭の五王」 中央公論新社・中公新書 2018年

北山茂夫 「日本の歴史4 平安京」 1969年

木下正史 「藤原京 よみがえる日本最初の都城」 中央公論新社・

中公新書 2003年

倉本一宏 「はじめての日本古代史」 筑摩書房・ちくまプリマー新

書 2019年

黒田日出男 「図説 日本史通覧」 帝国書院 2014年

佐伯智広 「皇位継承の中世史 血統をめぐる政治と内乱」 吉川

弘文館・歴史文化ライブラリー 2019年

佐々木恵介 「天皇の歴史3 天皇と摂政・関白」 講談社・講談社

学術文庫 2018年

武光誠 「日本古代国家と律令制」 吉川弘文館 1984年

ねずまさし 「天皇家の歴史(上)」 三一書房 1973年

保立道久 「平安王朝」 岩波書店・岩波新書 1996年

同 「日本の歴史【3】 平安時代」 岩波書店・岩波ジュニ

ア新書 1999年

本郷恵子 「院政 天皇と上皇の日本史」 講談社・講談社現代新書

2019年

宮崎一定 「古代大和朝廷」 筑摩書房・筑摩叢書 1988年

吉田孝 「日本の歴史【2】 飛鳥・奈良時代」 岩波書店・岩波ジ

ュニア新書 1999年

吉村武彦 「シリーズ日本古代史② ヤマト王権」 岩波書店・岩波

新書 2010年

和田萃 「飛鳥―歴史と風土を歩く―」 岩波書店・岩波新書 2003

## 参考サイト

安倍文珠院 安倍文珠院のご紹介

<https://www.abemonjuin.or.jp/about/> (令和2年9月17日閲覧)

宮内庁 皇室 天皇系図

<https://www.kunaicho.go.jp/about/kosei/keizu.html> (令和2年

9月14日閲覧)

埼玉県立さきたま史跡の博物館

<https://sakitama-muse.spec.ed.jp/> (令和2年9月8日閲覧)

桜井市 遺跡・文化財 箸墓古墳

<http://www.city.sakurai.lg.jp/kanko/isekibunkazai/kashiramoji/hagyo/1395214364761.html> (令和2年9月2日閲覧)

桜井市纏向学研究センター 纏向遺跡ってどんな遺跡？

<http://www.makimukugaku.jp/info/iseki.html> (令和2年9月7

日閲覧)

天理市 教育委員会 文化財課 行燈山古墳

<http://www.city.tenri.nara.jp/kakuka/kyouiku/inkai/bunkazaik/a/kohun/1407109012353.html> (令和2年9月2日閲覧)

奈良県歴史文化資源データベース

<http://www.pref.nara.jp/miryoku/ikasu-nara/ijin/tenmu/> (令

和2年9月2日閲覧)

武天皇

いかす・なら 奈良偉人伝 天

和天皇

http://www.pref.nara.jp/miryoku/ikasu-nara/ijin/tenmu/ (令

## 2-2 中世・近世の天皇制

この項では鎌倉時代から江戸時代までの天皇制について述べていきたいと思う。

### I. 概要

中世では武家政権が確立したことにより、天皇の権威は大きく低下することになる。具体的には、鎌倉、室町、江戸という三つの幕府が誕生し、一時的に天皇が権力を握ることはあったものの、基本的には武士が大きな権力を握っていたことに変わりはない。ただ、誕生した武家政権は自身の権威を誇張し、正当化するために天皇家を利用した。そのため、天皇家は存在し続けることとなった。そして江戸時代末期には天皇家の権力を生かして倒幕が行われ、再び天皇が力を握る時代が到来する。

### II. 鎌倉幕府と天皇

1185年、朝廷は源頼朝の要求によって守護と地頭の設置を容認することになる（文治の勅許）。これが、権力が朝廷から武家に移る一つのターニングポイントになる。かつて朝廷が掌握していた軍事、警察、土地の支配権は武家のものとなってしまう。その結果、朝廷の権威は下がってしまう。1192年には源頼朝が征夷大將軍に任じられ、武家政権（鎌倉幕府）が確立。朝廷の地位は大きく揺らいだ。ただ、幕府の支配が盤石だったのは東国だけで、西国では朝廷の権威が高かった。そのため、幕府と朝廷は支配権をめぐって対立し

ていくことになる。1192年に後白河法皇が崩御し、後鳥羽上皇の院政が始まるが、人事等を幕府から指摘されるなどして、なかなか順調にはいかなかった。そんな中、比較的朝廷との距離が近いといわれていた三代将軍源実朝が1219年に暗殺されると、朝廷と幕府の対立は激化する。後鳥羽上皇が倒幕に向けて動き出し、結果1221年に武力衝突が起きる。承久の乱である。戦の結果朝廷は敗れ、権威はさらに失墜した。また、幕府の西国の支配が確立。全国の支配権が幕府のものとなり、朝廷は幕府の管理下に置かれることとなる。例えば、皇位継承に関して幕府は口を挟めるようになった。このような体制が鎌倉時代の間続いていくことになる。

### Ⅲ. 鎌倉幕府滅亡と南北朝時代

その後、天皇家では皇位継承問題が起きる。1272年に後嵯峨天皇が崩御した際、天皇は後継ぎを明言していなかった。そのため、子の亀山と後深草の間で後継者争いが起きる。結果幕府の口出しで、亀山の大覚寺統と後深草の持明院統は交互に天皇を出し合うことになる。このことを両統迭立という。その後交互に天皇を出し合う時代が続く。1308年には持明院統の花園が即位するが、1317年に大覚寺統の後醍醐が花園の譲位を幕府に要望。このとき執権の北条高時は、10年ごとに両統が天皇を出し合うことを提案。これが文保の御和談である。その後1318年に後醍醐天皇が即位するが、10年には譲位しなければならなかった。このことに反発し、朝廷の権威を高めようと考えていた後醍醐天皇は、反乱を起こすことに決める。最初は失敗するが（正中の変）、再び反乱を起こす（元弘の変）。この時も後醍醐天皇は敗

れ、隠岐に流されるも、各地で豪族たちが反乱を起こした。当時幕府への反感が高まっていたこともあり、足利尊氏や新田義貞など幕府を裏切った者の活躍などで、1333年に幕府は滅んだ。しかしその後、後醍醐天皇は武士を排除して朝廷中心の政治を進めようとした。建武の新政である。この時、倒幕で活躍した武士は正当な恩賞をもらえず、朝廷に不信感を抱く。そして武士の不満が爆発した結果、足利尊氏が反乱を起こす。何度かの戦いの後、尊氏は天皇を降伏に追い込む。尊氏は持明院統の光明天皇を即位させ、後醍醐天皇から三種の神器をもらうが、この神器は偽物で、後醍醐は京から吉野に逃れる。そして本物の三種の神器を持つ後醍醐は自身が正統な天皇であると主張し、南朝を開く。一方の尊氏も京に北朝を開く。また、新たな武家政権の室町幕府を開いた。南北朝時代の幕開けである。北朝と南朝は何度も戦いを繰り返すが、南朝は次第に不利になる。しかしそんな折、足利尊氏は弟の直義と対立する（観応の擾乱）。南朝はこの混乱の中、京都に攻め入り、勢力を盛り返す。しかし京都での戦いに敗れると衰退していき、幕府の将軍が三代義満になるころには北朝の有利が明確になった。1392年、義満は南北朝を合一し、交互に天皇を出すことを提案。南朝は了承し、南北朝合一がなされた。しかし、この約束は破られ、天皇は北朝から出続けた。その後義満はますます権力を握り、朝廷の権威は再び低下することとなった。

### Ⅳ. 戦国・江戸期の天皇

1467年に始まった応仁の乱以降室町幕府の権力は低下し、各地の武将が争う戦国時代が幕を開けた。朝廷に権威はほぼなく、葬儀を行

えないほどの資金難に陥ることもあったという。そんな中で天皇の立場を利用して権力をとろうとする者が現れる。織田信長だ。信長は、上洛の後多くの敵と戦わなければならない局面があった（信長包囲網）。この際、当時の天皇である正親町天皇に講和の要請をするよう依頼し、難局を乗り越えた。また、信長は高い官位を朝廷からもらいかけていた（もらおうとしていた際に本能寺の変が起きた）。信長は天皇の地位を利用して権力を行使したが、このような行動をしたのは信長だけではない。豊臣秀吉は、朝廷に積極的な働きかけを行い、自身の権威を正当化しようとしたといわれる。というのも彼は農民出身だったからだ。また、権威を示す目的でも天皇を利用した。秀吉は、自身が建設した聚楽第に天皇を招き、自身の力を世に示したという話がある。このように、権力者たちに利用されるようになった天皇だが、再び武家政権に従う時代が来る。1603年、徳川家康が江戸幕府を開くと、幕府は朝廷の権威を削ぐと試みる。代表的な例は、禁中並公家諸法度である。この中で、天皇や公家は行動を制限された。また、幕府が朝廷よりも上に立つことがはつきりと示されたのが、紫衣事件である。朝廷には、高僧に紫衣を与え、金銭をもらう仕組みがあったが、資金難の朝廷は頻繁に紫衣を出し、資金源としていた。しかし幕府は紫衣を出すことを制限した。ただ後水尾天皇はこれを破ってしまった。すると幕府は紫衣をもらった僧侶を処罰したのである。こうして幕府が朝廷を管理する構図が出来上がり、それは幕末まで続いていくことになる。

## V. 幕末と天皇

1853年、ペリーが来航。1854年に日米和親条約を結ぶと、米国は1858年、日米修好通商条約を結ぶことを要求する。当時の老中堀田正睦は、孝明天皇に許可を取ろうとするが、外国人嫌いの天皇はこれを拒否した。その後大老に就任した井伊直弼は許可を得ずに条約を結んでしまう。ただ、直弼は反対派を弾圧したので反感を買い、暗殺されてしまう（桜田門外の変）。大老が暗殺されるという事件は幕府の権威を大きく低下させてしまう。堀田の後に老中に就任した安藤信正は、幕府の権威を取り戻すため、朝廷の協力を得ようとした。これを公武合体という。安藤は当時の將軍徳川家茂と孝明天皇の妹和宮を婚約させることを約束したが、代わりに外国人を追い払うこと（攘夷）を命じられた。当時外国人を追い払おうという思想を攘夷というが、天皇を中心と考える尊王論と結びつき尊王攘夷という思想が生まれていた。尊王攘夷派はこの約束された攘夷を決行すべく、長州藩を中心に活動を行う。しかし、天皇は長州藩のような過激な攘夷を好まず、むしろ公武合体を望み、攘夷は幕府が行うべきであると考えていた。そして八月十八日の政変で長州藩を中心とした尊王攘夷派は京から追放される。こうして天皇は公武合体を望むが、うまくはいかなかった。長州・薩摩といった強力な藩は次第に公武合体・攘夷の不可能を悟り、幕府を倒そうとする思想が生まれる。討幕派は幕府を倒すべく朝廷に働きかけを行い、倒幕が行われようとしていたその時、大政奉還が行われ、政権は朝廷に返されることになった。こうして武家政権は終わりを告げた。ただ、朝廷には政治能力が欠陥していて、再び徳川家が政権を握ると思われていた。しかしその後公家の岩倉具視が王政復古の号令を行い、朝廷が政治を行うと宣

言。幕府はここに滅亡し、明治を迎えることになる。

## VI. 参考文献

- ・網野善彦「日本社会と天皇制」(岩波書店) 1988年
- ・藤井譲治「天下人の時代」(吉川弘文館) 2011年
- ・二木謙一「源平争乱群雄ビジュアル百科」(ポプラ社) 2011年
- ・藤井英昭「幕末・維新群雄ビジュアル百科」(ポプラ社) 2010年
- ・高橋富雄「征夷大將軍」(中公新書) 1987年

(高一 H. S.)

## 2-3 近現代の天皇制

### I. 戦前

戦前における天皇の役割は、日本の主権者という立場であり、陸海軍の統帥権を持っていたほか、諸処の最高主権者としての権利を有していた。

天皇のこれらの権利の根拠は、言わずもがなであるが、大日本帝国憲法である。プロイセン時代のドイツの体制を大きく反映しており、主要著者である伊藤博文がこの頃のドイツの事実上の指導者であったビスマルクに心酔していたというエピソードは非常に有名である。しかし、もともと天皇制が復活したのは、純粹に明治維新推進派が、徳川家に対抗するための旗印として天皇を祭り上げたという側面が非常に大きく、維新の主要メンバーが、本当に天皇制を強く支持していたかという点に疑問がある。この、天皇の微妙な関係が、第二次世界大戦前夜の軍部の暴走を引き起こしたのである。天皇にもっと強い権力が与えられていれば、軍部にストップをかけることができたのだろうか、中途半端な権力であったため、逆に利用される形になってしまった。天皇の立場によって最初に引き起こされた重要な問題は、陸軍内の派閥である、統制派と皇道派の争いであるだろう。この闘争は、後に二・二六事件を引き起こすことになるが、事件はこれだけに限った話ではない。

まずは、統制派と皇道派について書かなければならないだろう。統制派は、非皇道派と分類されることが多いが、強いていうなら、軍

部内での軍事的行動を控えて統制を守ること、近代的な体制による高度国防国家構想などを推進していた。この派閥には、陸軍大学校を卒業した参謀おクラスの人員が多く分類されている。一方、皇道派は、地方出身の貧しい家の人が多く、日本の問題の多くは、根元に財閥があり、天皇がこの悪によってごまかされていると考えていた。そのため、この派閥は、財閥の規制と天皇権の強化を旗印としている。中心人物は、荒木貞夫で、この人物は、犬養内閣時に陸軍大臣に就任している。

この二派閥の衝突は、陸軍部内で白昼に行われるという衝撃的なものだ。統制派の中核人物で陸軍の至宝とも呼ばれた永田鉄山が執務中に、皇道派の相沢三郎中佐に斬殺されたのだ。この事件時、陸軍大臣はじめ、軍部のポストの多くが皇道派によって占められていたため、裁判は長引き、結局、二・二六事件の後、軍部内から行動波が一掃されるに至って解決した。二・二六事件もその代表格である。皇道派青年将校らが、東京の国家機関を襲撃し、一時的にクーデターによって東京を占拠したというものである。この中で、統制派の教育総監である渡辺錠太郎も死亡している。この目的は、天皇の取り巻きであり、天皇を誤った方向に導いていて、財閥とも近い枢密院議員らを取り除くというものだ。これによって、昭和天皇の腹心である、斎藤誠、高橋是清、岡田啓介などが襲撃され、そのおおくを失った。岡田啓介首相は、人違いで難を逃れている。昭和天皇は、これに激怒し、皇道派の精神的支柱であった天皇の後ろ盾を失った。この際、昭和天皇は、皇族の秩父宮と取り替えられるという危険を感じ、海軍の海兵部隊を東京に上陸させるといふ、強硬な策を

主導している。最終的に、陸軍内からも、海軍および天皇の姿勢に同調する勢力が現れ、クーデター部隊は、流血なく解散させられた。これにより、皇道派は現役から一掃された。この二派閥の最後の抗争は、統制派による一方的なものだった。広田弘毅内閣時に成立した軍部大臣現役武官制である。この法律は、軍部大臣になれるのは現役の軍人に限るとした法である。この法により、現役のいない皇道派が陸軍大臣に就くことができないようにしたこと、統制派の独占が確実となった。以上のことから分かるように、天皇の立場は非常に危うい側面も持っていた。実質的最高指導者ではあったが、直接的に掌握していたわけではないため、足元から揺さぶりを受ける可能性が十分にあったのだ。また、皇道派のように、都合よく利用して責任を覆いかぶせる勢力も現れる。主権者ではあるが、意外に脆い権力しか持たなかったというのが、戦前の天皇の特徴であったのではないだろうか。

## Ⅱ. 戦後そして今

G H Q の進駐によって、天皇の権力はほぼ無くなった。もともと天皇は、戦争遂行の責任者として処罰されるはずであったが、マッカーサー将軍が、天皇の処罰は、日本統治の観点から得策ではないと判断し、天皇については、不問となった。新憲法の規定によると、その権利のほとんどは剥奪され、象徴として新たなスタートを迎えた。現在でも、国事行為を執り行っているが、以前と比べるとその仕事は大幅に減っている。その他にも、各地を回る行幸と称すること



をしているが、その財源は全て税金によって賄われており、戦後の長い間で莫大な金額が費やされてきた。天皇は日本誕生以来ずっと続いてきたことになっているが、その地位に関しては、今後も大きな議論の余地がある。

(高一 M. A.)

## 第三章 近年の問題

### 3-1 生前退位

#### I. 生前退位の歴史

生前退位とは言い換えると「譲位」である。歴史上の生前退位は譲位と呼ばれることが多いので、歴史については「譲位」という言葉を用いて説明していきたい。

過去125回の皇位継承のうち、譲位によって行われたのは59代57人である。こう見ると多いように思われるが、始めて譲位が行われたのは、645年の第35代皇極天皇から第36代孝徳天皇への譲位だ。それ以前は、天皇は崩御するまで務めるというという暗黙の了解のようなものがあったとされる。ただ645年に初の譲位が行われて以後、41代、43代、44代、45代、46代、47代と、多く譲位が行われるようになる。どうして譲位が多く行われるようになったのか。理由として二つが挙げられる。一つは、「後継者問題解決のため」である。当時天皇家では後継者問題が多発していた。蘇我氏の介入などで天皇家は後継者を誰にするのかといった議論が多く行われるようになっていた。仮に天皇が崩御すると次の天皇の座を争ってしまうケースも存在した。そこで譲位を行うことで、継承をスムーズに行おうとしたわけである。蘇我氏以外にも、天皇家内部の問題や、藤原氏等の介入でその後も後継者問題が起こっていくが、こういった時の対処法として譲位という手段がとられてきた。理由の二つ目は、「仏教

の普及」である。当時は仏教が普及し始めた頃なわけであるが、仏教には死を穢れたものとみなす考え方がある。よって天皇が在位中に崩御するのはタブー視されることになり、譲位が行われやすくなった。

このような理由から譲位は多く行われるようになり、645年以後、江戸時代まで譲位は行われ続けることになる。なお、江戸時代最後に行われた譲位は、第119代光格天皇が1817年に行ったものである。しかし明治時代に入ると、天皇の譲位は認められなくなり、実際に旧皇室典範に明記された。なぜ明治政府は天皇の譲位を認めなかったのか。原因の一つとして、政府が仏教を排除しようとしたからだといわれている。政府は徹底した仏教の排除を行っていたため、仏教と関連のある譲位も行われなくなったと考えれば当然のことかもしれない。この仕組みは日本国憲法下でも続いてきた。ただその後、再び譲位（生前退位）が行われることになるが、これは次の項で述べることにしよう。

## Ⅱ. 生前退位までの経緯

ことの発端は2016年7月13日。NHKが「天皇陛下『生前退位』の御意向」とのスクープを出したことだ。同年8月8日、陛下自身が国民に向けたビデオメッセージ「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」を公開した。このメッセージで陛下は、自身の象徴としての立場を明確にしたうえで、身体の衰えによってこれまでのように全身全霊で象徴の務めを果たすのは難しいと述べられた。当時の陛下は82歳であり、何度も手術を受けながら公務に臨まれて

きたのであった。当時の世論はどうだったのかというと、退位を認めるべきであるという意見が80〜90%と、大半の国民が陛下の生前退位に同意する形になった。政府は同年9月に、座長を今井敬日本経団連名誉会長とする有識者会議を設置。11月の会合で16人にヒアリングが行われたが、この時は生前退位への賛否の割合は拮抗していたという。そんな中、国会も退位問題に着手し始める。議論の結果、

- ①今上天皇が退位できるように立法措置を講じる
- ②法改正は特例法制定で対処する

という結論がでて、これは「議論のとりまとめ」として当時の安倍総理に渡された。①の理由としては、世論の影響が大きいとされている。また、②に関しては、生前退位を容認すると皇室典範に明記するのか、特例法を作って限定的に認めるのか意見が割れたが、結果として特例措置とされることになった。また、有識者会議でも同様の議論が行われていた。そして、そこでもこの退位を特例とする方向になった。

これらをもとに政府は法案整備に取り掛かり、「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が六月九日に成立した。その後皇室会議において退位は2019年4月30日と定められた。

以上が生前退位の経緯になる。次に元号の問題について触れておきたい。退位日は難なく決まったが、元号の発表日はなかなか決まらなかった。特例法には「国民生活に支障が出ないようにする」とされていたので、政府は退位のある程度前に発表することが検討されたが、保守派は反対した。両者の調整の結果、一か月前に発表される

ことになり、2019年4月1日に新元号「令和」が発表された。

4月30日に陛下は退位され、5月1日に現在の天皇陛下が即位された。

## 参考

・nippon.com「終身制」は変えず特例法で…天皇退位実現までの経緯」(<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c06103/>)

・ダイヤモンド・オンライン「天皇の生前退位は57回もあった、「譲位」が持つ深い意味とは」(<https://diamond.jp/articles/-/200269?page=3>)

・NHK「「生前退位」 実現までの流れは…」(<https://www3.nhk.or.jp/news/special/japansempor/okimochi4.html>)

(高一 Y. K.)

## 3—2 女系天皇について

### 1. 女系天皇問題の概要

#### 1. はじめに

女性天皇、女系天皇の議論は二十年ほど前から活発になったものであり、議論自体を知っている方は多いだろう。女性天皇に関しては、その名の通り女性が天皇の位を継ぐことであるから分かりやすいが、女系天皇と突然言われて何のことか説明できる方は少ないと思う。そこで、まずは混同されがちな女性天皇と女系天皇について説明し、次に女性天皇と女系天皇についてそれぞれのような議論があるのかを説明していきたい。

#### 2. 女系天皇とは？女性天皇との違い

女性天皇は、前述の通り女性が天皇の位を継ぐことであるが、女系天皇とは男系と違って「母方から皇室の血統を受け継ぐ」という血筋を区別した言葉であって、女性天皇とは概念自体が異なっているのだ。分かりやすいいえば、父親を遡っていけばいずれは天皇家に辿り着くのが男系で、逆に母親を遡っていけばいずれは天皇家に辿り着くのが女系天皇である。そして、天皇制が始まって以来女系天皇というのは存在しない。

歴代の天皇のうち女性天皇は8人10代（2人の天皇が重祚、（重祚（ちようそ）とは一度退位した天子（ここでは天皇）がもう一度位に就くこと）で、最も古い女性天皇は第33代の推古天皇、最後の女性天皇は江戸時代の第117代の後桜町天皇だ。た

だ、いずれの女性天皇も皇統を中断させないための中継ぎとして登場し、後の皇位を男系の男性天皇に引き継いでいたようだ。例えば、女性天皇として広く知られる持統天皇は、男系男性の天智天皇の娘であるため男系の天皇だと言える。そして、その次に天皇の座についたのは男系男性の天武天皇の孫の文武天皇が継ぎ、男系の血を守った。このように、女性天皇は確かに歴史上存在したのだが、皇位が女系の天皇に移ったことは一度もなかった。しかし、古代には女系による皇位継承が法的に認められていたとする説もある。根拠としているのは、第46代孝謙天皇（女性天皇）時代の西暦757年に施行された「養老律令」の中にある「継嗣令」の条文で、「天皇の兄弟、皇子はみな親王となす」との規定の注記に「女帝の子どもまた同じ」というものである。しかし、継嗣令では女性皇族は男性皇族と結婚する義務があり、女性天皇も例外ではなかった。そのため、女帝に子が生まれても男系の血を引いているため、仮にその子が即位しても女系とはならない仕組みになっていたようだ。

ここまでの話で、女性天皇と女系天皇の違いや歴史的な経緯は理解して頂けただろうか。それでは、現代の女系天皇の議論の話に移ろう。

## Ⅱ. 女系天皇の議論

平成になってから盛んに議論がなされるようになった皇位継承問題の経緯を振り返ってみる。平成5年の皇太子さまと雅子さまのご成婚後、しばらくの間はお子さまがなく、各宮家にも男子が生まれていないという現実が続いた。皇太子さまに継ぐ最も若い皇位継承

者は、5歳下の弟である秋篠宮文仁親王であり、将来的には皇統が途絶えてしまうのではないかという不安が指摘され始めた。宮内庁関係者はあくまでも水面下だが、皇位継承者を増やすための打開策について慎重な検討に入った。

そうした中、平成23（2011）年2月に愛子内親王が誕生されて世間はお祝いムードに包まれた。しかし、現状の皇室典範では愛子さまに皇位継承の資格がなかったため、政府関係者の間では皇室典範を改正して「女性天皇」を認める案が有力視されるようになった。

そして、有識者会議は平成17（2005）年11月、「皇位継承者を女性天皇あるいは女系天皇に拡大することが適当」とする最終報告書を当時の小泉首相に提出。これを受けて政府は「皇室典範改正準備室」を設置して、次期通常国会に皇室典範の改正法案を提出する準備に入った。

こうした中、平成20（2006）年2月、秋篠宮妃紀子さまの「懐妊が公表された。与野党の慎重論が高まったのを受け、小泉首相は皇室典範改正法案の提出を先送りすることを発表。同年9月6日に悠仁親王が誕生されると、法案自体の提出取りやめを決めた。

小泉首相の後任の安倍首相は同年10月、参議院本会議で「慎重に冷静に、国民の賛同が得られるように議論を重ねる必要がある」と発言し、翌平成19（2007）年1月には、「悠仁親王の誕生により（有識者会議の）報告書の前提条件が変わった」として報告書を白紙に戻す方針を示し、平成20（2008）年12月には麻生首相が有識者会議の廃止を決裁した。

しかし、民主党政権下の平成23(2011)年10月、羽毛田宮内庁長官は野田佳彦首相を訪ね、火急の案件として「女性宮家」の創設を要請した。女性皇族が結婚後も皇族の身分を保持して皇室の活動を支えることなどが目的とされ、これを受けて政府は、皇室典範改正準備室を平成24(2012)年2月から7月にかけて6回にわたり開催し、「皇室制度に関する有識者ヒアリング」を行った。翌年の通常国会に皇室典範改正法案等の提出を目指したが、識者から将来的に女系天皇につなげようとするものなどの異論が噴き出し、野田内閣は同年10月に典範改正を断念した。その後、同年12月の選挙で民主党は破れ、2度目の総理に就いた安倍首相は男系を重視する立場から野田政権の取り組みを白紙に戻す意向を示し、あくまでも時間をかけて慎重に検討するとの立場を貫いている。

## おわりに

悠仁親王が誕生したことによって、女系天皇の議論は先送りになることは出来た。しかし、今後も男子が生まれなかった場合には、皇統を中断させないための中継ぎとして女性天皇を立て、男系を維持させるためにその子供をまた天皇家に嫁がせるということをするのだろうか。皇室は二千年以上の歴史があるとは言え、人権問題も盛んに叫ばれている今、昔のやり方のままでいいのか、もう一度立ち止まって考えてみる必要があるのかもしれない。

## 参考文献

皇室入門——椎谷哲夫 著

## 社研を引退して

社会科研究部、略して社研。私が入部した中一の頃の自分の学年の部員は6人と社研としては多い方であったが、中学校の1学年の全体の人数300人に比べれば僅か50分の1だ。社研部員というのはやはり他の人から見ればレアな存在であったのだろう、社研というあだ名をつけられたことさえあった。そんな社研に私が入ったのは部活の勧誘会で面白そうだったから入ってみようかな、という単純な動機であり、入学するまで社研の存在は知らなかったような気がする。しかし、当時の社研も人数が少ないながらも社会に関する話題でかなり盛り上がっていて、それが面白くて引き込まれてしまった。私は当初は社会科の中でも地理などには興味はあったが、政治などにはあまり興味は無かった。しかし、先輩や同級生と話しているうちに次第に興味を持つようになり、今ではすっかり政治・経済オタクである。興味を持つ分野が変わった・新しく出来たというのはやはり今後の人生を左右するものであると思うから、やはり社研は私にとって重要な存在であったと思う。社研であった出来事を話すと話が終わらなくなるので割愛するが、忘れられないような強烈な思い出も含めて、色々な思い出を作ることが出来た。

あつという間に入部してから4年半が経ち、ついに引退の時期になってしまった。今まで社研の先輩、同級生、そして顧問の先生方に本当にお世話になった。この場を借りて感謝の意を表したい。この歴史ある、そしてこの私を育ててくれた社会科研究部という1つのバトンを後輩のみんなには是非とも受け継いでもらいたい。

## 社研を引退して

2016年5月、初めての中間試験の最終日。部活動紹介のパンフレットを眺めていたら、活動内容のところに「中学入試予想問題の作成」と書いてあるのを見つけたのが社会科研究部との出会いだった。小学生の頃の得意科目といえば社会だったので（今では理系を選択し共通テストでしか使わない科目となってしまうのだが）、作ってみたいと思い、書いてあった社研のメアドに早速連絡し入部。当時の高2の部長は非常に温厚な方で、優しく接してくれたのを覚えている。最初は社会の右も左も分からない状態から入ったのだが、部活に出るうち、勉強していくうちにだんだん話にもついていけるようになり、非常に楽しい場所となっていた。初めての文化祭では若気の至りで声を上げて呼び込みをし、そのあと喉を痛めた覚えもある。一方で中1の頃に書いた博物館訪問記の書きようは情けなく感じる。このときの文化祭の打ち上げ後で当時の部長が涙を流していたこと、その部長の「社研を引退して」が印象に残っている。

中2にあがり、後輩ができるかと思ったがこの年は入らず再び最年少学年に。中2の頃は我が強かったようで、当時の部長と合宿でもめた覚えがある。2代連続で部員がいなくなると廃部の危機という噂の中、中3になりやっと後輩ができた。このころには既に結構先輩とも頻繁にたわいのない会話をするようになっており、より一層居心地がよくなった。しかし、自分が中3↓高1の時の代替わりでは遂に先輩が1学年しかいなくなってしまうう

え、再び部員が入らず当時は3代しか部員がいなくなってしまう。少数精鋭の中調べ上げた「水防」は自分の関心も高かったこと、文化祭の「ノーベル学会」で先輩とともに研究発表できたこともあり、今まで携わった全体研究の中で一番のお気に入りの研究である。

そして、ついに1つ上の代も引退してしまい自分は部長となったものの2代しか現役部員はいなくなるかと思ったが、歴史研究同好会が我が部に加わり晴れて1つ下の代の部員が入った。(僕がうまく部活を運営できずに2月までの活動では全体研究のテーマ決めと本の買い出ししかできなかったのは本当に申し訳ないです。)心機一転4月からバリバリ活動を進めていこうと思ったら例の感染症により活動休止。だが、6月からは顧問の先生方の支えによりオンラインで活動することができた。行く先不透明の中、何とか新入部員勧誘会は開かれて、なんと中1部員と編入生の高1部員が例年より多く入ってくれた。そんな中、文化祭の延期が決定し、引退時期も先延ばしに。こうして2学期中間試験最終日という本来なら引退している時期にこの文章を書いているのである。引退を意識し始めるこの頃、これからの社研の発展に非常に期待している。

最後に後輩へのアドバイス(?)を。

①自信を持って活動を!

マイナー部活のため「何やってるの?」と聞かれることも多いかもしれませんが、他己評価を気にしすぎず自信を持って。特に部誌。

②平凡なひと時こそ大切に!  
毎年やることが似ているかもしれませんが、学年超えて交流できる時間は結構限られています。コロナ禍ではこれを痛感しました。

(See you again! 高一 K.M.)

## 社研を引退して

初めて社会化研究部と言う名前を目にしたのは中学一年生の部活勧誘会でした。当時の部長の松岡さんのプレゼンを聞いて、なんかそのやることもなさそうだけどなんだか楽しそうな雰囲気になって、特に入りたい部活もなかったので仮入部のノートに名前を書いてから四年半と少し。入部前に想像したのと同じかそれよりも緩い雰囲気の中、なんだかんだ引退までやりきることができました。

思い返すと様々なことがあったと思います。毎年の文化祭や、中一、中二の時の合宿、他校との交流や勧誘会など大きな出来事だけでもいろいろな思い出があります。もちろん、楽しかった思い出ばかりだけでなく、切を壊滅的に守らないことが歴代の編集長の皆さんに本当に迷惑をかけました。謹んでお詫びします(と言っているこの文章も遅れてしまってます。本当にすいません)。また、社研と言う枠に属しながらの悪行が様々な方に迷惑をおかけしました。本当に申し訳ありませんでした。特に僕が中一、中二の頃の部長だった大和さんには特にご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。

閑話休題。そんないろんな出来事があった中でもやっぱりなんだかんだ一番覚えてるのは日々の部活でした。僕はこの部活の普段の空気が好きだったのだと思います。ゆるくて何をするわけでもないのだけれどたまに時事問題なんかを扱った会話が進み、個性的な部員たちがそれぞれ言いたいことを言っていくような空気が。それだから、顧問の先生に怒られたり、ほかの部活に入ってなかなか部活に行けなくなったりしてもずっと続けられたのだと思います。

今年は例年に比べて新入部員がかなり入ってくれました。これだななんとかこの伝統ある部活の最後の代にならずに済んだと少しホッとしています。これから社研がどうなっていくかは正直全然わかりません。引退した後に顔を出すなんてことはあり得ないと思いますし、そういう部活だからこんなに楽しくできたのだと思います。ただ、僕が好きだったあんな空気が(先輩が部活中に突然SHと喧嘩しだすような空気が)形を変えながらも少し残っていてくれたら嬉しいなあと思います。

それでは、未来の社研に幸あらんことを！

(高二 F.T.)



## 部員名簿

今年度は個人情報保護の観点から人数のみを記載します。ご了承ください。

中一…7人 中三…4人 高一…9人 高二…3人 合計23人

最後になりましたが、1年間ご指導くださいました顧問の先生方、OBの皆様、ありがとうございました。

『蹤跡』 六十一号

令和二年十一月 発行

令和二年十一月 印刷

編集…高一・H・S・

印刷所…開成高等学校教員室 輪転機

発行…東京都荒川区西日暮里四―二―四

開成学園社会科学研究部

本書の一部又は全部を無断で複製乃至転載することを禁ずる